

### 3. 本発掘調査

確認調査の成果にもとづいて平成23年度より実施した。調査区は南北に長く、現道や隣接の民家、耕作地などに影響がないよう注意しながら作業を進めた。また交通量が多いため交通事故の防止、特に児童・生徒の登下校時には細心の注意をはらって作業を進めた。事業の進捗に応じて調査を進めたため、平成23年度の調査は現水路や里道を保護するため調査区が細分化され、後にこの部分を追加して調査し、最終的には対象地のはば全域を調査した。調査の方式は事業を委託したものと職員のみを派遣する直接執行方式の2種がある。

調査対象地は学校に隣接していたため、岡野小学校5年生の授業の一環として見学を行い、公立蘿山産業高校は測量學習の一環として空中写真測量の一端を学ぶため土木科生徒有志の作業見学があった。また、平成23年9月10日には現地説明会を行い多数の参加者があった。

西岡屋遺跡

平成23年度

遺跡調査番号 2011001

調査期間 平成23年6月4日～10月13日

調査面積 802m<sup>2</sup>

調査担当者 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

調査第2課 山上 雅弘・長濱 誠司

概要

現道により調査区は2地区（1・2区）に分かれる。

ヤケヤノ坪遺跡

平成23年度

遺跡調査番号 2011002

調査期間 平成23年6月4日～10月13日

調査面積 693m<sup>2</sup>

調査担当者 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

調査第2課 山上 雅弘・長濱 誠司

概要

農道確保のため調査区は2地区に分かれる。また、残土処理の都合から南北に2分割して調査を実施した。

平成24年度

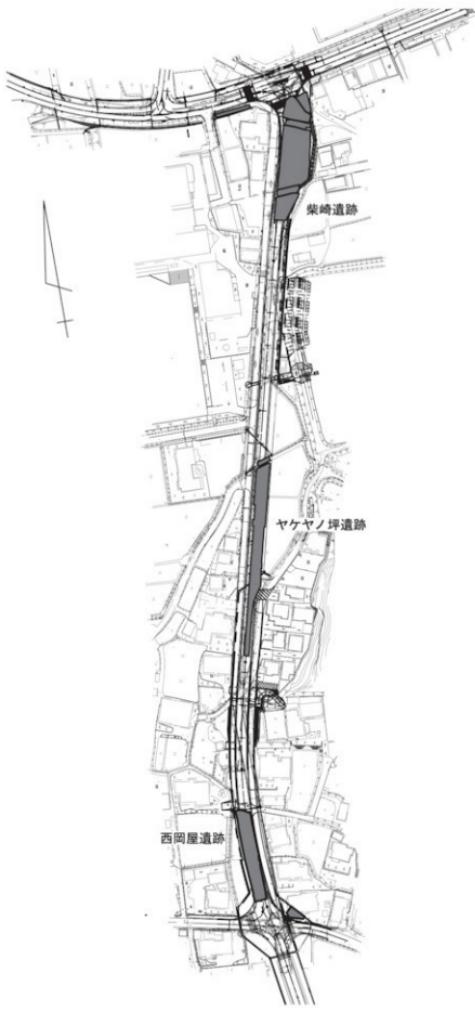
遺跡調査番号 2012156

調査期間 平成24年11月29日～12月25日

調査面積 248m<sup>2</sup>

調査担当者 公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

調査第2課 久保 弘幸・鐵 英記



第4図 本発掘調査区の位置

#### 概 要

平成23年度調査区北東側と調査を実施できなかった農道部分などを対象とした。

#### 平成25年度

遺跡調査番号 2013038

調査期間 平成25年5月22・23日

調査面積 16m<sup>2</sup>

調査担当者 兵庫県立考古博物館総務部

埋蔵文化財課 多賀 茂治

#### 概 要

平成24年度調査区北側の農道部分を対象として調査した。

#### 柴崎遺跡

#### 平成23年度

遺跡調査番号 2011003

調査期間 平成23年6月4日～10月13日

調査面積 1,203m<sup>2</sup>

調査担当者 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

調査第2課 山上 雅弘・長演 誠司

#### 概 要

調査区は水路・通路などを保護するため3地区（1～3区）に分かれる。

#### 平成24年度

遺跡調査番号 2012002

調査期間 平成24年8月6日～8日

調査面積 230m<sup>2</sup>

調査担当者 兵庫県立考古博物館総務部

埋蔵文化財課 上田 健太郎

#### 概 要

平成23年度の本発掘調査時に未買収や水路・通路など保護のため調査できなかった箇所を対象に調査したため4地区（4～7区）に細分される。

### 第3節 出土品整理作業の経過

西岡屋遺跡他の出土品整理作業は、発掘調査時に現地にて出土遺物を予備的に水洗したことに始まるが、本格的な作業は平成26年度から開始し、2カ年で発掘調査報告書刊行までの諸作業を行った。

平成26年度

水洗、ネーミング作業を魚住分館にて行い、作業終了後に県立考古博物館に遺物を搬入し接合・補強、実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理、金属器保存処理を行った。

なお、遺物写真撮影は株式会社クレアオオに委託して行った。

#### 整理作業の体制

整理保存課

課長 高瀬 一嘉

事務担当 姫田 淳子

進行担当 長濱 誠司

保存処理担当 岡本 一秀

#### 整理技術嘱託員

今村 直子・藤尾 智子・吉村 あけみ・前谷 幸次

荻野 麻衣・島村 順子・嶺岡 美見・上田 紗耶香・小野 調子・平宮 可奈子・藤池 かづさ・

上西 淳子・沼田 真奈美

栗山 美奈・高瀬 敏子・八木 和子・山口 陽太

桂 昭子・佐々木 愛・梶原 奈津子

平成27年度

図面補正、トレース、レイアウトから報告書印刷までの作業を行い、報告書を刊行した。

#### 整理作業の体制

整理保存課

課長 高瀬 一嘉

事務担当 姫田 淳子

進行担当 長濱 誠司

保存処理担当 岡本 一秀

#### 整理技術嘱託員

八木 和子・寺西 梨紗

## 第2章 遺跡をとりまく環境

### 第1節 地理的環境

西岡屋遺跡など本報告の遺跡は兵庫県篠山市に所在する。

篠山市は兵庫県東部の県境付近に位置し、京都府に接している。市域は1999年、いわゆる「平成の大合併」によって篠山町、丹南町、今田町、西紀町の旧多紀郡4町が1市になったもので、市域の面積は約377km<sup>2</sup>あり、そのうち75%を山地が占める。市域のうち今田町を除く3町は「篠山盆地」と呼称される盆地である。盆地は東西約12km、南北約4kmの長円形を呈し、標高は200mを測り、南側を除く周辺地域とは100m近い北高差がある。北側は日本海と瀬戸内海との分水嶺でもある多紀連山、南側は深山山地など周囲を標高500~800mの山地に挟まれる。これら山地は固い丹波層群で構成され、急峻な山容を呈するため、他地域から篠山盆地へ入るには険しい峰道を経なければならない。山地の前面には盆地に面し標高500m未満の山や丘陵がある。盆地の平野部には丹波層群により形成された鳥状の独立丘陵が点在し、特徴ある景観を形成する。盆地に面した山や丘陵、独立丘陵上には古墳や山城が築かれ、裾部には集落遺跡などが立地する。このうち盆地の中央付近に所在する「鉢山」丘陵上には近世に篠山城が築かれ、この地が現在も行政の中心となっている。

盆地の河川は日本海に注ぐ由良川水系、瀬戸内海に注ぐ加古川水系、武庫川水系があり、これら水系の分水界は盆地内の平野部にある。加古川支流の篠山川は盆地中央部を西に貫流し、支流を集め、川代渓谷を経て丹波市山南町付近で加古川に合流する。盆地南西部のみ谷底平野を通じて南流する武庫川水系につながり三田盆地に至る。主要交通路は、武庫川水系に沿ってJR福知山線、国道176号、舞鶴・若狭自動車道路が大阪と、国道372号が播磨地域、京都と結んでいる。大阪方面との交通の利便性が向上したことにより人口の増加がみられたが、近年は人口減少、高齢化が顕著になっている。

西岡屋遺跡など本報告の遺跡は旧篠山町に所在し、城下町である市街地の西側に位置する。遺跡周辺は段丘化した地形を呈し、篠山川の河床から10m前後の北高差を測る。さらに西岡屋遺跡やヤケヤノ坪遺跡の東側には標高260mの独立小丘陵が所在し、市街地との間を隔てている。

### 第2節 歴史的環境

篠山盆地は古墳や城館など多くの遺跡が知られている。しかし西岡屋遺跡周辺は発掘調査例が少なく遺跡の状況は不明な点が多いことから、ここでは盆地内の主要遺跡を概観する。

#### 旧石器・縄文時代

盆地西部の板井寺ヶ谷遺跡で後期旧石器時代の集落が確認され、始良丹沢火山灰の上下に文化層が確認された。また縄文時代草創期の尖頭器が出土している。盆地東部の藤岡山遺跡からはチャート製木葉形尖頭器などが出土する。

縄文時代は、藤岡山遺跡で中~晚期、筱見遺跡では後期~晚期の土器・石器などが出土する。

### 弥生時代

西岡屋遺跡付近の集落の状況は不明である。盆地全域を見渡すと、前期の遺跡として西部の口坂本遺跡、四の坪遺跡がある。当該期の遺物が出土し遺跡は中期まで存続する。

中期に入ると遺跡数が増加し、その多くは後期へと継続して集落が営まれる。西岡屋遺跡の羅山川対岸に所在する東古佐遺跡（9）は湿地に投棄された状態で土器が出土し、近隣に集落があるものと考える。竈円寺遺跡（19）は中期の住居跡、後期の掘立柱建物跡が検出されている。周辺からは多量の遺物が出土し、拠点的な集落の存在が想定される。西部の桂ヶ谷遺跡A地区は丘陵斜面に弥生時代中期～終末期の集落が展開する。

東部の車塚の坪遺跡では中期の土塁墓群や方形周溝墓があり隣接して集落の一端が検出され、居住域、墓域が区分されている状況がみられる。藤岡山遺跡でも中期の周溝墓を検出している。

後期の墳墓は丘陵上に台状墓などを築造する。西部の三沢迦山北麓遺跡群のうち、ずえが谷遺跡では台地上に方形周溝墓が、終末期には桂ヶ谷墳墓群で尾根上に台状墓群が築かれる。内場山墳丘墓は盆地を西から眺望できる尾根上に位置する終末期の首長墓であり、長大な素環頭太刀などが副葬される。

### 古墳時代

盆地内に前期古墳は少なく、調査例はわずかしかない。

古墳時代中期に入り大型古墳が出現する。盆地東部に所在する雲部車塚古墳は埴丘長約140mの前方後円墳で丹波国では最大の古墳である。堅穴式石槨に長持形石棺が納められ、周囲には大量の武器・武具類が副葬されていた。近隣には大型方墳である北条古墳、姫塚古墳が所在する。盆地中央部には直径52.5mの大型円墳である新宮古墳（29）が5世紀後半に築造される。この地域には碁石塚古墳（30）、郡家八幡塚古墳（32）と大型古墳が連続して築造される。長者ヶ谷1号墳（14）は埴丘上に石と埴輪列を伴う。

後期に入ると盆地全域で古墳が築造されるようになる。まず6世紀前葉には塚ノ山1号墳のような木棺墓に須恵器を副葬する中の円墳が現れる。護摩ヶ谷古墳群（8）は多くは10m前後の円墳で構成されるが、5・16号墳は前方後円墳の可能性がある。石くど古墳（28）は中部の大型古墳の系譜を引く首長墓であると考えられる。

この時代の集落の実態は明らかでないが、寺内遺跡（27）では前期の住居が検出される。東古佐遺跡（9）では遺構は確認されていないが、古墳時代前・後期の土器が湿地に投棄された状態で出土し、近隣に集落があるものと考える。竈円寺遺跡（19）から出土した須恵器は5世紀前半にさかのほるものがあり、郡内で最も早く須恵器を受容した集落である。西岡屋遺跡周辺では、背後の丘陵に諏訪山古墳群（4）、飛の山古墳群（6）があることから、被葬者の母集落が付近に存在していた可能性が考えられる。

### 古代

篠山盆地は丹波国多紀郡にあたる。柴崎遺跡付近には「郡家」地名が残る。郡衙に関連する遺構は確認されていないが郡家に隣接する東浜谷遺跡（40）から出土した須恵器には「郡」の刻印や「肩」の墨書きをもつものがあり、付近に郡衙が所在した可能性は高い。また古代山陰道が盆地を東西に通過する。想定されるルートは、東部の天引峠から篠山盆地に入り、「郡家」付近を経て西部の鐘ヶ坂峠を越え水上郡に抜ける。「延喜式」によれば郡内には小野・長柄の2駅駅家が設置される。このうち小野駅家は東部に

「小野」地名が残り、付近の二ノ坪遺跡から古代の土器が多量に出土していることから、小野地区付近が推定地となっている。長柄駅家は大型掘立柱建物跡や井戸が検出され、「永丙」の墨書き土器が出土した下小西の坪遺跡（43）付近が有力な推定地である。古代寺院の可能性がある遺跡としては竈内寺遺跡（19）、寺内遺跡（27）がある。伽藍を構成する遺構は検出されていないが、瓦などが多く出土し、近隣に瓦窯跡が所在する。

この時期の須恵器生産は西部の大山地区にあり、そのうち才蔵坊窯跡から「郡」の刻印土器が採取されている。また下小西の坪遺跡出土土器と類似した土器もあり、ここで生産した須恵器が地方官衙へ供給されていたと推定される。

本報告遺跡の周辺には郡衙推定地の東浜谷遺跡、駅家間連遺跡の下小西の坪遺跡、寺院跡である寺内遺跡があり、律令期における多紀郡の中核がこの地域にあったことはほぼ間違いないであろう。

#### 中近世

盆地内には権門領の荘園が多く存在し、西部にある東寺領大山荘が著名である。調査区周辺には岡屋荘、郡家荘、吹莊があったとされるが、詳細は不明である。一方で中世集落に間わる発掘調査例は増加する傾向にあり、盆地内の様相が明らかになりつつある。東部の八上土遺跡は13~14世紀の集落跡である。

西岡屋遺跡の対岸に所在するのは東古佐遺跡（9）13世紀前半、東中道ノ坪遺跡（7）は12世紀末~13世紀前半の集落が形成される。西部の西木ノ部遺跡では11~13世紀初頭の集落が検出され、遺構の変遷状況から近衛家領宮田荘成立と関連する可能性も指摘されている。

中世の主要な城館として東部に所在する八上城がある。多紀郡を支配した波多野氏の本拠として知られ、山麓の丹波街道沿いなどには城下町が想定されている。八上城をめぐっては明智光秀と攻防戦が繰り広げられ防衛のための城や明智光秀の陣城が丘陵や平地に築かれる。包囲戦の末に八上城は落城し波多野氏は滅亡するが、その後も明智に統いて豊臣系大名が城代を置き、多紀郡支配の中核であり続けた。

本調査区周辺には、飛の山城跡（5）、網掛城跡（14）、吹城跡（16）、谷山城跡（18）、熊谷城跡（34）、盃山城跡（39）、今福城跡（44）などの城郭が所在する。このうち谷山城跡（18）は丹波街道沿いにあり盆地内では規模の大きい山城であり波多野家老中平林氏が築城したとされる。その他の城館は在地勢力が築城した小規模な城郭である。網掛城跡は八上城包囲戦の中で八上城の西の防御拠点である吹城攻めのために明智光秀が築城したとされる。

篠山城（20）は盆地中央部の独立丘陵「篠山」に築城された平山城である。徳川幕府が関ヶ原合戦後に農臣家と西国諸大名を分断する目的で1609年に築城され八上城主松平康重が入城、翌年には町屋も八上城下から移転させた。城下町（21）は城を中核に整然と仕切られ、防御にも重点を置いて城塞の一部としている。近世の篠山は篠山藩5万石の城下町として栄え、城は近世を通じて存続したが明治維新後に廢城となり建築物の大半は取り壊された。



第5図 周辺の遺跡

- 1 西岡屋遺跡 2 ヤケヤノ坪遺跡 3 柴崎遺跡 4 游谷古墳群 5 飛の山古墳群
- 7 東中道ノ坪遺跡 8 渡摩ケ谷古墳群 9 東古佐遺跡 10 東吹西山古墳群 11 美師山古墳群 12 網掛古墳群
- 13 大平山古墳群 14 樹掛城跡古墳・長者ヶ谷古墳群 15 美師山古墳 16 吹城跡 17 城山古墳群
- 18 谷山城跡 19 龍円寺道路 20 篠山城跡・篠山城下町 21 篠山城下町 22 沢田城跡 23 沢田八幡古墳群
- 24 和田山古墳群 25 美師尾古墳群 26 寺内遺跡 28 石くど古墳 29 新宮古墳
- 30 暮石塚古墳 32 郡家八幡古墳 33 遊谷古墳群 34 熊谷城跡 35 田中浦坪古墳・中田浦城跡
- 36 佐倉宮ノ谷古墳群 37 時ノ東古墳群 38 イヤン谷古墳群 39 孟山城跡 40 東浜谷道路 41 古屋敷ノ坪遺跡
- 42 野尻遺跡 43 下小西の坪遺跡 44 今福城跡 45 名柄古墳群 46 大野平志古墳群 47 三篠山古墳群
- 48 大野北山古墳群・大野墓山古墳群 49 坪内古墳群 50 矢代城跡

## 第3章 西岡屋遺跡の調査

### 第1節 遺跡と調査の概要

本遺跡は篠山市街地西側に所在する独立丘陵の椎現山南西裾に位置する。篠山盆地では盆地内の独立丘陵裾部に集落遺跡が立地する傾向がみられ、本遺跡も同様の立地をしている。遺跡周辺の標高は200m前後を測り、篠山川川床との比高は約10mある。調査区は集落内の2面の水田でありその境界は段差となっている。基本層序は耕土直下で北半部は黄褐色シルトの地山となり断片的にクロボクが残存する。遺構検出面はこの地山直上だが、断面観察では、遺構はクロボク上面から掘り込まれていることを確認した。南半部の遺構検出面は砂質の強いシルトである。検出した遺構の時期は、古代、中世に大別でき、古代5棟、中世6棟の掘立柱建物跡を検出している。また、古代以前の溝を調査区北端で検出している。調査区は全面的に削平され遺構の遺存状況は良好でない。

### 第2節 遺構

#### 1. 掘立柱建物跡

SB01 (図版2 写真図版6)

検出状況 1区北半部で検出した。東壁際で検出し、遺構の大半は調査区東側へ広がるため全容は明らかにしえない。他の遺構との重複関係はない。

形状・規模 南北2間以上、東西1間以上の建物である。方位はN31°Eの偏りをもつ。検出した規模は東西1.8m、南北3.7mを測る。柱穴間距離は東西が1.8m、南北は1.6m、2.1mとばらつきがある。柱穴の並びはややいびつな。

柱穴 平面形が不整な円形または梢円形を呈し、規模は径0.5m程度である。遺構面は削平を受けているため、検出面からの深さは40cm程度と浅い。

出土遺物 国化できる遺物は出土していない。

SB02 (図版2 写真図版6・7)

検出状況 1区中央付近の西半で検出した。遺構は調査区西側へ広がるため全容は明らかにしえない。

SB03と重複するが、柱穴の切り合いがないため先後関係は明らかではない。また東側には同規模のSB04が所在する。

形状・規模 南北2間、東西2間以上の純柱建物として復元できる。方位はN18°Eの偏りをもつ。検出した規模は東西3.5m、南北3.5mを測る。柱穴間距離は1.8m前後であるが、東辺は1間約3.3mを測る。

柱穴 平面形が不整な梢円形を呈し、規模は径0.5~0.9m程度である。検出面からの深さは40cm程度である。

出土遺物 国化できる遺物は出土していない。

**SB03** (図版2 写真図版6・7)

検出状況 1区中央付近の西半で検出した。遺構は調査区西側へ広がるため全容は明らかにしえない。SB02と重複するが、柱穴の切り合いがないため先後関係は明らかではない。また東側には同規模のSB04が所在する。

形状・規模 南北2間、東西1間以上の純柱建物として復元できる。方位はN18°Eの偏りをもつ。検出した規模は東西1.9m、南北3.4mを測る。柱穴間距離は東西が1.9m、南北が1.6~1.7mである。

柱 穴 平面形が不整な楕円形や隅丸方形を呈し、規模は径0.5m程度である。検出面からの深さは20~30cmである。

出土遺物 P4から須恵器杯B底部(1)が出土している。

**SB04** (図版2 写真図版7・8)

検出状況 1区中央付近の東半で検出した。遺構は調査区東側へ広がるため全容は明らかにしえない。建物南辺がSD03と重複するが先後関係は明らかにしえなかつた。また西側には同規模のSB02・03が所在する。

形状・規模 南北2間、東西3間以上の純柱建物として復元でき、方位はN20°Eの偏りをもつ。検出した規模は東西4.1m、南北3.4mを測る。柱穴間距離は東西が1.2~1.3m、南北が約1.7~1.8mである。

柱 穴 平面形が不整楕円形を呈し、規模は径0.5m程度である。検出面からの深さは20~50cmである。

出土遺物 国化できる遺物は出土していない。

**SB05** (図版2 写真図版8・9)

検出状況 1区南半部で検出した。遺構は調査区西側へ広がるため全容は明らかにしえない。南北方向にのびる複数の溝と重複し、本遺構を構成する柱穴が溝に切られている。

形状・規模 東西2間以上、南北2間を測る東西棟の側柱建物である。方位はN2°Eの偏りをもつ。規模は東西5m以上、南北4.6mを測る。柱穴間距離は2.2~2.4mである。

柱 穴 平面形が不整な方形または楕円形を呈し、規模は長辺または長径0.7~1.0m、短辺または短径0.6~0.8mである。検出面からの深さは20~40cmである。

出土遺物 P7から須恵器杯B蓋(2)、P5から須恵器杯B身(3)が出土した。また、P3・P6は柱材がわずかに遺存していた。

**SB06** (図版3 写真図版9・10)

検出状況 調査区南半部で検出した。完掘したと考える。検出箇所は比較的遺構の密度が高くSB07、SD06などの溝と重複するが、切り合いがないため先後は不明である。

形状・規模 東西2間、南北3間を測る南北棟の純柱建物である。南北方向はほぼ磁北を示す。規模は東西4.2m、南北7.0mを測る。柱穴間距離は東西2m前後、南北2.6m前後である。

柱 穴 平面形は円形を呈し、規模は径30~40cm、検出面からの深さは30cmを測る。

出土遺物 P10から瓦器椀(4)、P11から土師器皿(5)、P2から土師器鍋(6)、青磁碗(7)、P7から瓦器小皿(8)、P3から土師器杯(9・10)、土師器小皿(11)、P6から瓦器椀(12)、P5から瓦器椀(19)、が出土している。

#### SB07 (図版3 写真図版10・11)

検出状況 調査区南半部で検出したが、さらに調査区西側へ広がる。検出箇所は比較的道構の密度が高くSB06やSD07などの溝と重複するが、切り合いがないため先後は不明である。

形状・規模 東西1間以上、南北4間を測る南北棟の純柱建物である。南北方向はほぼ磁北を示す。規模は東西2.5m以上、南北10.6mを測る。柱穴間距離は東西2.5m前後、南北2.6m前後である。

柱 穴 平面形は円形または梢円形を呈し、規模は径15~40cm、検出面からの深さは10~30cmを測る。

出土遺物 P9'から瓦器楕(13)、P8から須恵器楕(14)、瓦器小皿(15)、P7から土師器小皿(16・17)、瓦器楕(18)が出土している。

#### SB08 (図版3 写真図版11)

検出状況 1区南半部、調査区西壁際で南北方向に並ぶ柱穴列として認識した。東側には広がりが認められないが、調査区西側へ続く可能性があるため掘立柱建物跡としている。北端がSB05と重複し、出土遺物から本道構が後出する。

形状・規模 南北3間で方位はN3°Eの偏りをもつ。検出した規模は南北6.8mを測る。柱穴間距離は約2mである。

柱 穴 平面形が不整な円形を呈し、規模は径20~30cmである。検出面からの深さは10cm前後である。

出土遺物 図化できる遺物は出土していない。

#### SB09 (図版4 写真図版11・12)

検出状況 2区で検出したが調査区の制約から全容は明らかにしえなかった。SB10・11と重複するが、柱穴の切り合いがないため先後関係は不明である。検出位置からSD11は本建物の雨落溝と考える。

形状・規模 南北2間以上、東西2間以上の純柱建物として復元できる。方位はほぼ磁標北を向く。検出した規模は東西4.9m、南北5.6mを測る。柱穴間距離は東西が2.4~2.5m、南北が約2.8mである。

柱 穴 平面形は円形を呈し、規模は径30cm前後である。検出面からの深さは30~40cmである。柱穴の中には柱抜き取り後に礫や土器片を投入したものがある。

出土遺物 P3から須恵器楕(20)、P2から須恵器小皿(21)、土師器小皿(22・23)、瓦器楕(24)、瓦器皿(25)が出土した。

#### SB10 (図版4 写真図版12)

検出状況 2区で検出したが調査区の制約から全容は明らかにしえなかった。SB09・11と重複するが、柱穴の切り合いがないため先後関係は不明であるが、SD11は本建物の雨落溝と考えられ、SB09とは前後関係にあるものと考える。

形状・規模 南北1間以上、東西2間以上の純柱建物として復元できる。方位はほぼ磁標北を向く。検出した規模は東西4.4m、南北2.8mを測る。柱穴間距離は、東西方向のうち西1間分が2.3m、東側1間が2.1mを測り東側1間分がやや狭くなっている。南北方向は約2.8mである。

柱 穴 平面形は円形または梢円形を呈し、規模は径30cm前後である。検出面からの深さは20~40cmである。

出土遺物 図化できる遺物は出土していない。

#### SB11 (図版4 写真図版12)

検出状況 2区で検出したが調査区の制約から全容は明らかにしえなかつた。SB09・10と重複するが、柱穴の切り合いがないため先後関係は不明である。検出位置からSD10は本建物の雨落溝と考える。

形状・規模 南北2間以上、東西3間以上の総柱建物として復元できる。方位はほぼ座標北を向く。検出した規模は東西7.0m、南北5.0mを測る。柱穴間距離は、東西方向のうち西2間分が2.4m、東側1間が2.1mを測り東側1間分がやや狭くなっている。南北方向は約2.4~2.5mである。

柱 穴 平面形は円形を呈し、規模は径30cm前後である。検出面からの深さは10~20cmである。

出土遺物 P7から須恵器椀(26)、須恵器小皿(27)、土師器甕(28)、P1から須恵器椀(29)が出土した。

## 2. 溝

#### SD01 (図版5 写真図版13)

検出状況 調査区北端で検出した。本道構付近は道構密度が低く他の道構との重複はみられない。北側には丘陵の張り出しがあり、確認調査の結果では道構は検出されなかつたことから、本道構が道跡の北限を示すものと考えている。

形状・規模 北西から南東方向に延び、両側とも調査区外へ延びる。検出長は10mを測る。

幅1.3m、検出面からの深さ1.1mを測り箱掘り状に掘削される。

埋 土 砂礫の堆積はなく激しい流水の痕跡は認められない。灰色系シルトによる緩やかな堆積と肩部の崩れを繰り返し埋没していく。このうち5層は地山ブロックが混じり人為的な埋土の可能性がある。最終的に凹地として残存していたものが古代に完全に埋没する。

出土遺物 最上層からは須恵器棱椀(32・33)、須恵器皿A(34)、須恵器杯または皿(35)、須恵器甕(36)、土馬(37)など古代の遺物が出土し、完全に埋没した時期は古代であると推定される。出土遺物の中には官衙遺跡から出土するものがあり、当時期の遺跡の性格を示すものと考える。最上層以外からは遺物の出土がなく開削時期は不明である。

#### SD03 (図版5 写真図版14)

検出状況 1区中央部の段差付近で検出しSB04南辺と重複する。SB04を構成しない柱穴に切られている。

形状・規模 東西方向の溝でありSB04とはほぼ同方向を示す。検出長約5mで西端はSB04南西隅付近で収束し、東側は調査区東側へ続く。幅は不整形だが0.6~0.8m前後を測る。断面形は皿状を呈し検出面からの深さは5cm程度である。

埋 土 クロボクを埋土とし、一部細礫が混じる。

出土遺物 遺物は出土していない。

#### SD04 (図版5)

検出状況 調査区中央部で検出した南北方向の溝である。南半で同様の形態の東西方向の溝と交差する。

SB02・04と重複するが、先後関係は不明である。

形状・規模 ほぼ南北方向を示し、直線的にのびる。両端ともに調査区内で収束している。検出長は約3mである。幅は25cm、検出面からの深さは5cm程度で断面形は皿状を呈する。規模や形状から耕作痕

の可能性がある。

埋 土 クロボクを埋土とする。

出土遺物 遺物は出土していない。

#### SD05（図版5 写真図版14）

検出状況 1区中央部の段差付近で検出した南側は段差により消滅し、西側は調査区外へ延びている。

他の遺構との重複はみられない。

形状・規模 L字状に延びる溝である。幅20cm、検出面からの深さは5cm程度で断面は皿状を呈する。

遺構の性格は不明である。

埋 土 接灰シルト質細～極細砂の單層である。

出土遺物 遺物は出土していない。

#### SD06・07・08・09（図版5 写真図版14）

検出状況 調査区南半部で検出した。

形状・規模 いずれも南北方向に延び断面は皿状や浅いU字状を呈する溝である。このうちSD06は幅0.5～0.8m、検出面からの深さ15cm程度を測る。大半の溝は水田に伴うものと考えるが、SD06は検出位置から屋敷地を区画する性格の溝の可能性がある。

埋 土 SD06については粗糲・細緻の堆積が部分的に認められる。その他の溝については、クロボクを主体とする埋土である。

出土遺物 SD06の埋土内より土師器皿（38・39）、瓦器碗（40）が出土している。他の溝からは遺物は出土していない。

#### SD10・11（図版5 写真図版13・14）

検出状況 2区東半部で検出した南北方向に平行してのびる溝である。重複がないため、先後関係は不明である。

形状・規模 南北方向に直線的に延び、検出長はSD10が約4m、SD11が約3.5mであり、両端ともに調査区外へ延びる。規模は幅がSD10は40cm、SD11は30cm、検出面からの深さはいずれも5cm程度である。検出位置からSD10はSB09・10、SD11はSB11の雨落溝であろう。

埋 土 いずれもクロボクを主体とする。

出土遺物 遺物は出土していない。

### 第3節 出土遺物

#### 1. 土器・石器・金属器

##### SB03出土遺物（図版22 写真図版32）

1は須恵器杯B底部である。やや外に踏み張る高台を貼り付ける。

##### SB05出土遺物（図版22 写真図版31・32）

2は須恵器杯B蓋である。頂部には扁平な笠形のつまみが付く。扁平な器形で丸みをもち端部に至る。

端部は短く屈曲させるが鈍い。3は須恵器杯B身である。高台は短く直立するがわずかに外側へ踏み張る。

**SB06出土遺物** (図版22 写真図版31・33)

4は瓦器楕である。外面は上部を横ナデ調整、下半には指頭圧痕が残る。5は土師器皿である。ヘラ切りの底部から内溝ぎみに体部が立ち上がる。6は土師器鍋である。体部から口演部がぐに屈曲し端部は外方水平方向につまみ出す。体部は最大径が下半にあり、左上がり方向のタキを施す。内面にはタキに対応する押さえの痕跡があり、これをナデ消す。7は青磁碗である。緑灰色を呈し外面は鋪蓮弁文を陽刻する。8は瓦器皿である。短く体部を立ち上げ、端部は丸くおさめる。9・10は土師器杯である。9は復元口径13.1cm、10は16.3cmである。平底の底部から体部を外開きに立ち上げて端部を丸くおさめる。底部は回転ヘラ切り。12は瓦器楕である。体部が丸く内溝しながら立ち上がり、上半は1段のナデで仕上げる。高台は断面三角形を呈する。19は瓦器楕である。内面に比較的密なミガキを施す。

**SB07出土遺物** (図版22 写真図版31・33)

13は瓦器楕である。体部が丸く内溝しながら立ち上がり、上半は2段のナデで仕上げる。内面は比較的密にミガキを施す。高台はハ字に踏み張る。14は須恵器楕である。平底の底部から体部が直線的に立ち上がる。底部外面は回転糸切りで見込部がわずかにくぼむ。15は瓦器小皿である。体部が短く立ち上がり端部は尖らせぎみである。外面は指頭圧痕がみられ、内面は不定方向のナデにより仕上げている。16・17は土師器小皿であり、16は糸切皿である。体部は16が斜め上方に開き端部を丸くおさめる。17は短く立ち上がる。18は瓦器楕である。18は上半に2段のナデを行い、端部は尖りぎみとなる。

**SB09出土遺物** (図版22 写真図版33)

20は須恵器楕である。斜め上方に直線的に立ち上がり端部はやや肥厚する。21は須恵器小皿である。底部から斜め上方に立ち上がる。22・23は土師器小皿である。復元口径は22が10.3cm、23が10.7cmとはほぼ同規模である。22は底部ヘラ切りで口縁部が短く立ち上がる。23は内溝ぎみに立ち上がる。24は瓦器楕である。体部は内溝ぎみに立ち上がり、口縁部は2段のナデで仕上げ端部は直立する。高台は断面三角形を貼り付ける。25は瓦器皿である。復元口径14.9cmを測る。底部から体部が内溝ぎみに立ち上がり、口縁部はナデを施すことで体部との境界がやや屈曲する。

**SB11出土遺物** (図版22 写真図版31・33)

26は須恵器楕である。平底の底部から体部が直線的に立ち上がる。底部外面は回転糸切り。27は須恵器小皿である。口縁部が短く立ち上がる。糸切皿。28は土師器甌である。体部の形態は不明だが、口縁部は体部からく字状に屈曲し短く外反する。内面はハケ調整で外面はほぼ全面堀が付着する。29は須恵器楕である。平底の底部から体部が直線的に立ち上がり、端部は肥厚する。底部外面は回転糸切りで見込部がわずかにくぼむ。

**柱穴出土遺物** (図版5 写真図版31・33)

掘立柱建物跡を復元しない単独の柱穴から出土したものである。30はP36から出土の土師器小皿である。ヘラ切りの底部から短い口縁部が斜め上方に立ち上がる。復元口径9.1cmに対し器高1.1cmと低い。31はP07出土の青磁碗である。外面は擗描文、内面は沈線が1条巡り、擗描青光文と片彫を施す。体部下半を除いて施釉し、灰オリーブを呈する。同安窯産であろう。

**SD01出土遺物** (図版23 写真図版32)

32・33は須恵器のいわゆる稜椀である。32は復元口径14.5cm、器高6.0cm、33は復元口径16.8cm、器高5.4cmとプロポーションは異なるが、体部途中で屈曲し、斜め上方に立ち上がる。口縁部内面には沈線が1条巡る。33は口縁部がやや外反し端部が直立する。高台は32が踏ん張り、33は直立する。34は須恵器皿Aである。底部から体部が屈曲しやや外反しながら立ち上がる。口縁部内面に沈線が1条巡る。35は須恵器杯または皿の底部である。内面に判読不明であるが墨書きが認められる。36は須恵器甕である。頭部でく字に屈曲し外反する。口縁端面は平坦である。37は土馬である。

#### SD06出土遺物（図版23 写真図版34）

38は土師器皿であろう。器形は5と同様のものになると考える。39は土師器皿である。底部から屈曲して体部は直線的に立ち上がる。端部は尖らせぎみである。糸切皿。40は瓦器椀である。体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は2段のナデで仕上げ口縁端部は直立ぎみである。高台は断面三角形である。

#### 包含層等出土遺物（図版23 写真図版31・34）

41は丹波焼甕である。本調査区付近に所在した民家の解体に伴う廃棄物を投棄したゴミ穴から出土したものである。鉄袖を施袖の後黒釉を流し掛けける。

42~44は粗製の製埴土器である。破片の出土だが、厚手で深い鉢形の器形であろう。外面には指頭圧痕がみられる。45・46は瓦器椀である。体部は斜め上方に立ち上がり、45の口縁部は肥厚ぎみである。46の内面は残存する部分において比較的密なミガキが認められる。高台はいずれも断面三角形を貼り付ける。

47は須恵器杯B蓋である。天井部は扁平で口縁部へ屈曲させる。境界部の棱が明瞭である。端部の屈曲はわずかな痕跡程度である。つまみは扁平な笠形を呈する。48・49は須恵器杯B身である。高台は体部との境界付近でやや外に踏ん張るように貼り付ける。50は須恵器のいわゆる稜椀である。復元口径16.8cm、器高6.4cmを測る。体部中位付近で屈曲し、外反ぎみに立ち上がる。口縁部内面には沈線が1条巡る。

S 1は凹基式石旗である。サスカイト製で肉眼観察では諸岐産と判断する。長さ2.1cm、幅1.5cm、厚さ0.38cm、重さ0.8g

M 1は鉄釘であり、先端を丸く。断面は1辺4~5mmの方形を呈し、残存長13.4cm。

## 2. 煉瓦（図版30~32 写真図版43・44）

西岡屋遺跡の盛土除去中に多量の煉瓦や広義イギリス積の軸体片が出土した。煉瓦には目地に用いられたモルタルの付着やコールタールが塗布されたものがあり、なんらかの構造物に用いられた煉瓦の投棄であろうことが考えられた。このうち64点を採集し、うち15点を選択的に取り上げ、残りについては計測や表面観察のみを行った。なお採集の基準は完形であることを優先し、刻印の有無や調整の特徴などは考慮していない。

煉瓦は表面観察から、手抜成形、機械成形されたものが混在することを確認した。ただし出土煉瓦の大半は手抜成形煉瓦で57点(89%)を数え、機械成形煉瓦は7点(11%)に過ぎない。ただしこれらは遺難遺物であるため、軸体における使用比率を反映しているものでもない。

#### 手抜成形煉瓦（B 1~13）

当該の煉瓦は、平面が平滑な面（A面）とやや凸凹があり粗いナデがみられる面（B面）であること、

B面に凹線状圧痕がみられること、長手・小口の抜き砂の付着、長手面にはB面に向いてU字状の皺が確認できるなどの特徴がある。これらを手抜成形されたものと判断した。58点のうち5点に製造所を示すと考えられる「刻印」が確認できた。以下この刻印ごとに分類する。

確認できた刻印は以下の3種である。

- ① 推定堺煉瓦会社 8点
- ② 不明（仮称籠目） 10点
- ③ 岸和田煉瓦会社 26点

#### ① 推定堺煉瓦（B 1～3）

從来堺煉瓦会社とされている刻印が確認できる煉瓦は8点出土している。刻印は一方の小口寄りに押印する特徴があり、両面に押印するものと、B面にのみ押印するものがある。

刻印の形態から3種に分類できる

- a種 交点が凸状をなし周囲の平面と地続き
- b種 交点が凸状をなし五角形の島状となる
- c種 「大」字状をなす

a類は3点出土、b類は2点出土、c類は3点出土、他に不明瞭ながら堺の可能性がある刻印が1点ある。

平均寸法は、 $22.71 \times 10.92 \times 5.95\text{cm}$ であり、個体ごとの寸法のばらつきは少ない。

#### ② 仮称籠目（B 4）

10点出土した。どこの製造所を示す印かは明らかでないが、同じ刻印が大阪市内で確認されている。また刻印はすべて両平面の中央付近に押印される。押印の傾向は岸和田や推定堺と共に、刻印を2回押すのは岸和田とも共通する。したがってこの刻印の煉瓦は大阪府下に所在する比較的規模の大きな製造所で生産された可能性が高いと考えている。

煉瓦表面に傷やひびが比較的目立つ。一部に焼成温度が低めとおもわれるものがあり、品質管理が十分でないことが推定される。

平均寸法は $22.57 \times 10.76 \times 5.81\text{cm}$ を測りやや小型である。

#### ③ 岸和田煉瓦会社（B 5～13）

最も出土数が多く、26点ある。基本的に両平面に社章である「×」を押印するが、刻印を1回押すものと2回押すものがある。社印は印の形状で2種に分類でき、さらにa類は印の釘のとめ方から2種に細分することができる。

- a種
  - a - 1 2点でとめる
  - a - 2 中央の1点でとめる

b類 「×」が線状 1点を確認したのみである。

またa類の社印にカタカナ1文字を組み合わせたものがあり、2種の押印方法が認められる。

社印+カタカナ1文字を両面に押印

社印+カタカナ 1 文字を片面に押印

カタカナは、イ（1点）、ニ（1点）、ヘ（2点）、ト（4点）、ノ（1点）の5文字、計9点を確認した。文字は、本来は少なくとも「イ」から「ト」までの7文字はあるものと思われる。なお「イ」は原体を正位置で印にしたため鏡文字となっている。

平均寸法は $23.04 \times 11.15 \times 6.15\text{cm}$ を測るが、b類や社印+カタカナの刻印を有する煉瓦はやや大型である。岸和田煉瓦会社は全て自社生産しているのではなく、一部は契約関係にあった製造所で生産され岸和田煉瓦会社へ納品されたものも含まれると思われる。刻印のバリエーションは生産者の多さに関連しているものと考える。

#### 機械成形煉瓦（B14・15）

平面が「縮縫状」をなし、切断の際に弧状に砂粒の動いた痕跡が見られることが特徴であり、機械成形と判断した。

刻印は7点のうち3点に岸和田、2点に丸棒の先に「×」を陽刻した原体のものがある。後者が岸和田刻印かは今後の資料の増加を得たねばならないが、少なくとも機械成形煉瓦の半数以上は岸和田で製作されたものと判断できるだろう。なお岸和田での成形機械導入は明治39年とされる。

長さ22.6~23.4cm、幅10.6~11.4cm、厚さ5.7~6.3cmを測り、平均寸法は、 $23.02 \times 11.02 \times 5.97\text{cm}$ である。岸和田製造の手抜成形煉瓦と比較すると、長さ、幅はばらつき、平均ともに近似する。

#### 煉瓦寸法の比較

出土煉瓦の平均寸法は、手抜成形の煉瓦は、長さ22.84cm、幅11.00cm、厚さ6.04cmを測る。大阪窯業支配人大高左衛門が1905（明治38）年に記した関西の煉瓦は5種あり、このうち鉄道に関連するもの3種を除くと、並形（22.42cm×106.1cm×53.0cm）、東京形（22.73cm×109.1cm×60.6cm）の2種がある。今回報告する煉瓦の示す数値は東京形の範疇にあることが明らかである。大高によると関西では官庁などでも並形が使用される傾向にあったが、当時のシェアは3:7前後と圧倒的に東京形が優勢であったという。兵庫県内でも並形煉瓦が確認できる構造物は明治10年代~20年代のものであり明治30年代以降はほぼ確認できない。

煉瓦は型枠により成形されるが、成形の達上、乾燥、焼成によって収縮する。そこで型枠は原土の収縮を考慮に入れて大きめに作られている。それでも製品の寸法にはばらつきが生じるが、ある程度のばらつきは積み上げ時に目地により解消ができる。ただし目地に集約し過ぎると構造物が弱体化するため、製品の許容寸法が定められる。

大正13年制定の日本標準規格（JES）では普通煉瓦の寸法の公差を長さ・幅が $\pm 3\%$ 、厚さが $\pm 4\%$ とした。また鉄道における並形煉瓦では長さで2分、幅および厚さで1分の伸縮を許容している（「並形煉化石仕様書」明治44年7月 達563号）。これらからみると、規格寸法よりも長さで6mm程度、幅・厚さで3mm程度が許容されているといえよう。仮に日本標準規格（JES）の公差を東京形に当てはめると長さ22.02~23.38cm（ $\pm 6.81\text{mm}$ ）、幅10.58~11.23cm（ $\pm 3.21\text{mm}$ ）、厚さ5.76~6.24cm（ $\pm 2.4\text{mm}$ ）、「並形煉化石仕様書」を東京形に当てはめると22.13~23.33cm（ $\pm 6\text{mm}$ ）、10.61~11.21cm（ $\pm 3\text{mm}$ ）、厚さ5.76~6.36cm（ $\pm 3\text{mm}$ ）が許容範囲となる。

以上から長さ22.0~23.3cm、幅10.6~11.2cm、厚さ5.7~6.3cmが概ね公差の範囲内となるが、刻印

(製造所) 別に寸法のばらつき、平均と東京形との比較をしてみたい。

#### 手抜成形 推定標

長さ22.4 (98%) ~23.0 (101%) cm、平均22.70cm (99%)  
幅10.6 (97%) ~11.0cm (100%)、平均10.91cm (100%)  
厚さ5.7 (94%) ~6.1cm (100%)、平均5.96cm (98%)

#### 岸和田

長さ22.5 (98%) ~23.8cm (104%)、平均23.04cm (100%)  
幅10.7 (98%) ~11.6cm (106%)、平均11.15cm (102%)  
厚さ5.9 (97%) ~6.4cm (105%)、平均6.15cm (101%)

#### 仮称竪目

長さ22.0 (96%) ~23.1cm (101%) 平均22.57cm (99%)  
幅10.4 (95%) ~11.2cm (102%)、平均10.76cm (98%)  
厚さ5.6 (92%) ~6.0cm (99%)、平均5.81cm (95%)

#### 刻印なし、不明

長さ22.0 (96%) ~23.2cm (102%)、平均22.74cm (100%)  
幅10.6 (97%) ~11.2cm (102%)、平均10.94cm (100%)  
厚さ5.9 (97%) ~6.2cm (102%)、平均6.06cm (100%)

機械成形 長さ22.6 (99%) ~23.4cm (102%) 平均23.02cm (101%)  
幅10.6 (97%) ~11.4cm (104%) 平均11.0cm (101%)  
厚さ5.7 (94%) ~6.3cm (103%) 平均5.97cm (98%)

#### 煉瓦の来歴

出土煉瓦は遺跡遺物であり調査地点で構造物として存在したのではない。ただし一括して移動されたものであり、本来は構造物群をなしていたものと考える。刻印から煉瓦が大阪近郊に所在する大手製造会社の製品であり、大量生産されたもの、換言すると大量発注されたものであることは間違いないが、付近に発注元となりうる鉄道や大規模な工場はない。

遺跡付近の民家では風呂の焚口や炊事場の焼き口に煉瓦を用いている。現存する民家2軒について各使用煉瓦を計測し、その平均値を出した。

A家: 20.6×9.68×5.66cm

B家: 20.53×9.94×5.58cm

両データともに出土煉瓦よりも小型であり、系譜を異にすることは明らかである。この寸法は1921(大正14)年制定のJES「普通煉瓦」(21×10×6 cm)よりやや小型であるが、これを指向した寸法とみられる。

遺跡北側に陸軍歩兵第七十聯隊跡地がある。現在高等学校、官公庁、民間工場の敷地となっているが、少数だが煉瓦造の構造物が現存する。連隊跡地に現存する煉瓦構造物について使用煉瓦の寸法を計測し

第1表 西岡屋遺跡出土煉瓦計測表

放影	刻印番号	長さ		幅		厚さ		刻印・分類
		cm 東京巣との比						
概定場	B 1	22.5	0.990	11.0	1.008	5.7	0.941	a類
		23.0	1.012	10.6	0.972	5.9	0.974	a類
		22.9	1.007	11.0	1.008	6.1	1.007	b類
		22.6	0.994	10.9	0.999	6.1	1.007	b類
	B 2	22.6	0.994	10.9	0.999	6.1	1.007	b類
		22.7	0.999	10.9	0.999	5.8	0.957	c類
	B 3	22.9	1.007	11.0	1.008	6.1	1.007	c類
		22.4	0.985	11.0	1.008	5.9	0.974	増か
	平均	22.70	0.999	10.91	1.000	5.96	0.983	
假称織日		22.9	1.007	11.2	1.027	5.8	0.967	
		23.1	1.016	11.0	1.008	6.0	0.990	
	B 4	22.7	0.999	10.8	0.990	5.8	0.957	
		22.3	0.981	10.6	0.972	5.8	0.957	
		23.3	1.025	11.0	1.008	6.0	0.990	
		22.1	0.972	10.4	0.953	5.6	0.924	
		22.6	0.994	10.5	0.962	6.0	0.990	
		22.2	0.977	10.6	0.972	5.6	0.924	
		22.5	0.990	10.9	0.999	5.9	0.974	
		22.0	0.968	10.6	0.972	5.6	0.924	
	平均	22.57	0.993	10.76	0.986	5.81	0.959	
手抜成田		22.8	1.003	11.0	1.008	6.4	1.056	a・1類
		22.8	1.003	11.0	1.008	6.0	0.990	a・1類
		23.0	1.012	11.2	1.027	6.2	1.023	a・1類
		23.1	1.016	11.4	1.045	6.1	1.007	a・1類
		23.1	1.016	11.1	1.017	5.9	0.974	a・1類
		22.8	1.003	10.9	0.999	6.2	1.023	a・1類
		23.3	1.025	11.0	1.008	6.3	1.040	a・1類
		22.6	0.994	10.7	0.981	5.9	0.974	a・1類
		23.2	1.014	11.1	1.045	6.3	1.040	a・1類
		22.9	1.003	10.9	0.999	6.0	0.990	a・1類
	B 5	23.5	1.034	11.4	1.045	6.2	1.023	a・1類 B面2回?
	B 6	22.8	1.003	10.8	0.990	5.9	0.974	a・2類
	B 7	23.4	1.029	11.1	1.017	6.1	1.007	a・1類
	B 8	23.2	1.021	11.4	1.045	6.2	1.023	a類・「」B面2回
	B 9	23.6	1.038	11.4	1.045	6.4	1.056	a・1類2回・A面(二)
	B 10	23.2	1.021	10.8	0.990	6.2	1.023	a・1類・「△」
		23.3	1.025	11.3	1.036	6.2	1.023	a・1類・「△」2回
	B 11	22.5	0.990	10.7	0.981	6.2	1.023	a類・「ト」
		22.8	1.003	11.6	1.063	6.2	1.023	a・1類2回・「ト」
		23.3	1.025	11.1	1.017	6.1	1.007	a類・「ト」
		22.8	1.003	11.6	1.063	6.2	1.023	a類・「ト」
		23.8	1.047	11.4	1.045	6.1	1.007	a類・「ノ」A面のみ
		22.6	0.994	11.0	1.008	6.0	0.990	a類
		23.1	1.016	11.1	1.017	6.3	1.040	a類
	B 13	22.9	1.007	11.2	1.027	6.3	1.040	a類 A面2回
		23.0	1.012	11.6	1.063	6.2	1.023	b類 A面にカナ?
	平均	23.04	1.003	11.15	1.023	6.15	1.015	
有無不明		22.1	0.972	11.0	1.008	5.9	0.974	
		22.8	1.003	10.7	0.981	6.2	1.023	
		22.8	1.003	10.9	0.999	6.2	1.023	
		22.8	1.003	10.7	0.981	6.0	0.990	
		23.2	1.021	11.2	1.027	6.1	1.007	
		23.2	1.021	11.2	1.027	6.1	1.007	
		22.8	1.003	11.0	1.008	6.1	1.007	
		22.0	0.968	10.6	0.972	5.9	0.974	
		23.2	1.021	11.4	1.045	6.0	0.990	
		22.9	1.007	10.7	0.981	5.9	0.974	
機械成形		22.6	0.994	11.2	1.027	6.2	1.023	
		22.5	0.990	10.8	0.990	6.2	1.023	
		22.8	1.003	10.9	0.999	6.0	0.990	
	B 14	23.4	1.029	10.6	0.972	6.3	1.040	a類
		23.4	1.029	11.4	1.045	6.0	0.990	a類
		23.0	1.012	11.0	1.008	5.9	0.974	a類
		22.8	1.003	11.3	1.027	5.9	0.974	丸巻み
	B 15	22.6	0.994	10.9	0.999	5.7	0.941	丸巻み
		22.6	1.007	11.2	1.027	5.8	0.957	
		23.2	1.021	10.8	0.990	6.2	1.023	
	全平均	22.84	1.005	11.06	1.009	6.04	0.998	
なし								

てその平均値を出した。

- ・煉瓦造倉庫 22.5×10.82×6.04cm
- ・正門門柱 22.45×10.52×5.75cm
- ・敷地北東部の門柱 22.63×10.95×5.89cm

これらの煉瓦は東京形煉瓦の寸法の範疇にあり、出土煉瓦の平均寸法と比較すると正門門柱に使用の煉瓦がやや小型であることを除けば、ほぼ近似した数値を示している。正門門柱の煉瓦は仮称籠目刻印の寸法に近似し、長手や小口表面の状態の肉眼観察でも類似している。

聯隊跡地に隣接する西岡屋の民家ではゴミ焼場や土留として煉瓦が再利用され、それらの中に岸和田や仮称籠目の刻印が確認できた。

歩兵第七十聯隊は日露戦争後ロシアに対抗する軍備増強の中で新編され、1908（明治41）年に篠山に移営、第2次大戦が終わる1945（昭和20）年まで存続した。これに従えば、出土煉瓦の上限は設営が決定した1907（明治40）年頃となる。

#### 総 括

- ・出土した煉瓦は、寸法が明治後期に主流な東京形である。
- ・機械成形の煉瓦では岸和田刻印のみ確認できるが、岸和田における成形機械導入は1906（明治39）年である。
- ・岸和田刻印煉瓦は明治後期～大正期の軍事施設や鉄道施設の多くで確認されている。

以上の理由から今回報告した煉瓦は明治40年以降の歩兵第七十聯隊設営に用いられたものと考える。

## 第4節 小 結

西岡屋遺跡では古代・中世の遺構を検出した。検出した遺構は掘立柱建物跡と溝である。SD01は古代の建物群に限る性格のものと考える。SD01北側は丘陵の張り出しとなり平成25年度に実施した確認調査でも遺構・遺物は確認されていない。

古代の遺構は、SB01～05がある。建物の偏りは、SB01～04がN20°～30°E、SB05がほぼ北を示し、両者には時期差があるものと考える。SB05の示す方位は中世の建物とほぼ同じであり、西岡屋周辺の地割がこの時期に変更された可能性を指摘しておく。SB02・03とSB04は建物の規模、南北の辺が揃うことから同一の建物群と把握でき、純柱建物であることから、倉庫を想定する。

SD01最上層や包含層出土遺物の中には棟楋、製塙土器、土馬など官衙を想定する遺物が出土しており、郡衙推定地が近いことからも検出遺構が郡衙関連施設の可能性が考えられる。ただし倉庫と想定されるSB02～04は郡衙の正倉とするには規模が小さく、SB05も大型建物とはいはず施設の中核とは考えがたい。今回の調査は施設の一端を検出し、さらに施設は調査区周辺に広がるのであろう。調査区は郡衙推定地と篠山川の中間付近に位置することから、郡衙の水運に関わる施設ではないかと推定する。

中世の遺構は、SB06～11である。調査区南北に分布し、複数が重複する。井戸など生活に関わる遺構は検出していないが、SD06を境界とする複数の屋敷地を形成するものと考える。ただし、調査区北半部でも当該時期の遺物が出土した柱穴を検出しており、さらに集落は広がりをもっていたものと考える。建物は少なくとも2回以上の建て替えが認められ、一定期間屋敷地が存続していたと考えられる。

## 第4章 ヤケヤノ坪遺跡の調査

### 第1節 遺跡と調査の概要

ヤケヤノ坪遺跡は独立丘陵である椎現山の北西山麓に位置する。南側は椎現山から西へ派生した尾根により西岡屋遺跡と、北側は谷地形により柴崎遺跡と隔てられる。

調査区の基本層序は、耕土、クロボク層、地山である。遺構はクロボク層直上から切り込んでいることを断面で確認したが、遺構埋土もクロボクを含むことから検出はクロボクを除去し、地山直上で行っている。遺構検出面はほぼ平坦である。検出した遺構は溝が大半であるが、溝の形状、出土遺物などから方形周溝墓の周溝であると判断した。方形周溝墓は調査区全域に分布する。その他の遺構は、掘立柱建物跡、柱穴、土坑、溝があり、これらは中世以降のものである。

発掘調査は平成23年度に南半部について実施したが、残置した農道部分や調査区北側にも遺構が広がることが明らかになったため、事業の進捗に従い平成24年度に北側の農地と農道部分の本発掘調査を行った。各調査に合わせて空中写真測量を行い、最終的に2次の調査成果を図上で結合している。さらに遺構が北側に広がることが明らかとなり、平成25年度に北側農道部分の調査を行い、遺跡の北限を確認した。

### 第2節 遺構

#### 1. 方形周溝墓

SX01 (図版8 写真図版19)

検出状況 調査区北端に位置する方形周溝墓である。南西側には約3m離れてSX02が所在する。遺構は調査区の北・東側に広がるが、北側は水路により破壊されている。周溝および墳丘は擾乱を受けている。上部は削平され、埋葬施設は確認できず、周溝部のみ遺存していた。

形状・規模 長辺は北東-南西方向を向く。全容は不明だが、周溝を含め検出した規模は、東西5m、南北10.2mである。

周溝 西周溝、南周溝がL字状に続く。西周溝は幅1.2~2.0m、検出面からの深さ20~30cmを測り底はほぼ平坦である。南周溝は幅70~80cmで底は起伏がある。中央付近は深さ13cm程度であるが、南西隅および東側へ傾斜をもち、深さは30cm以上ある。

墳丘 上部を削平され、盛土は遺存していない。周溝部の内側、検出した墳丘部の規模は、東西4.4m、南北9.3mを測る。

埋葬施設 主体部は確認できなかった。

出土遺物 西周溝より広口壺(51・52)、底部(59)が出土する。

SX02 (図版9・10 写真図版19)

検出状況 調査区北半に位置する方形周溝墓である。北東側にSX01、南西側にSX03が所在し、SX03とは周溝を共有する。遺構は調査区の制約から完掘しえず調査区の東側に広がる。上部は削平され、埋葬

施設は確認できず、周溝部のみ遺存していた。

**形状・規模** 長辺は北東－南西方向を向く。全容は不明だが、南北の周溝を検出している。南北は12.5mを測り、東西方向は東西6.2mを検出した。

**周溝** 北・西・南周溝を検出したがコ字にはつながない。北周溝はさらに東側へ続く。幅0.4～1.4mを測る。底は西から東へ傾斜をもち、深さは西側で10cm、東側で50cmを測る。西周溝は完掘した。幅0.6m、検出面からの深さ5～10cmを測り底はほぼ平坦である。南周溝はSX03と共有し、さらに東側へ続く。幅1～2mを測る。底は西から東へ傾斜をもち、深さは西側で10cm、東側で78cmを測る。

**墳丘** 上部を削平され、盛土は遺存していない。周溝部の内側、検出した墳丘部の規模は、南北11.2mを測る。

**埋葬施設** 主体部は確認できなかった。

**出土遺物** 西周溝中央付近より甕(53・54)、直口壺(55)、広口壺(56)、底部(57・58)が出土している。

#### SX03 (図版9・10 写真図版20)

**検出状況** 調査区北半部に位置する方形周溝墓である。北東側にSX02が所在し周溝を共有する。南側にはSX04が3m離れて所在する。遺構は調査区の制約から完掘しえず調査区の北東・南西側に広がるが、規模を復元することが可能である。上部は削平されているが、埋葬施設と周溝部が遺存していた。

**形状・規模** 長辺は北東－南西方向を向く。全容は不明だが、4辺の周溝を検出している。規模は、南北は15.5m、東西方向の復元規模は約10mである。

**周溝** 四辺の周溝を検出したが、いずれの周溝も完掘していない。北周溝はSX02と共有している。北・西周溝、南・東周溝がL字状につながる。西周溝は幅0.6m、検出面からの深さ8～15cmを測り底の起伏は少ないが隅部となる北端付近がやや浅くなる。南周溝幅0.6～1.5mを測る。底は隅部となる東端が浅く、西へ傾斜をもつ。深さは西側で70cm、東側で8cmを測る。東周溝は幅0.5mを測る。隅部となる南端付近が浅く、北側へ傾斜する。検出面からの深さは5～33cmである。

**墳丘** 上部を削平され、盛土は遺存していない。周溝部の内側、検出した墳丘部の規模は、南北14.3mを測る。東西の復元規模は約9.3mである。

**埋葬施設** 墳丘中央付近でSK02を検出した。主室はほぼ東西方向を示す長方形であり、墳丘の方向とは若干異なっている。長さ1.8m、幅0.9mを測る。検出面からの深さは6cmと浅く。棺の痕跡などは確認できなかった。

**出土遺物** 国化しうる遺物は出土していない。

#### SX04 (図版10 写真図版21)

**検出状況** 調査区中央部に位置する方形周溝墓である。北西側にSX03が所在するが、2～3m離れ、重複しない。南側にはSX05が約4m離れて所在し、両者間に木棺墓SK03がある。遺構は調査区の制約から完掘しえず、大半は調査区の東側に広がる。上部は削平され周溝部のみ遺存していた。

**形状・規模** 長辺は北東－南西方向を向く。全容は不明だが、西・南周溝を検出している。規模は、南北は4.5m以上、東西方向は不明である。

**周溝** 西・南周溝を検出したが、いずれの周溝も完掘していない。周溝はL字状につながっている。西周溝は幅0.5m、検出面からの深さ5～56cmを測り底の起伏は少ないが隅部となる南端付近から北へ

傾斜する。最深部を周溝の中央とすれば、本周溝墓は南北10m程度の規模となる。南周溝は隅部付近のみ検出した。幅0.5m、検出面からの深さ7cmを測る。

**埴 丘** 上部を削平され、盛土は遺存していない。

**埋葬施設** 主体部は確認できなかった。

**出土遺物** 周溝隅部付近で瓦(62)が出土している。

#### SX05 (図版11・12 写真図版21)

**検出状況** 調査区中央部に位置する方形周溝墓である。平行して東西にのびる2本の溝を検出したことから方形周溝墓と判断した。北東側にSX04が4m離れて所在する。南西側にはSX06が隣接し南北周溝を共有する。遺構は調査区の制約から完掘しえず、調査区の東側に広がる。上部は削平され周溝部のみ遺存していた。

**形状・規模** 長辺は北東-南西方向を向く。全容は不明だが、北・南周溝を検出している。規模は、南北は6.5mを測る。東西の規模は不明だが、南北周溝の西端が揃うことから、この付近に西周溝の存在を想定すれば、5m以上の規模を想定できる。なお、西周溝の想定位置はSX04西周溝の延長にある。

**周 溝** 北・南周溝を検出したが、いずれの周溝も完掘していない。周溝は平行する。北周溝は幅0.8m、検出面からの深さ10~24cmを測る。底は平坦である。南周溝は幅1.1m、検出面からの深さ13~20cmを測る。底は、起伏はないが東から西へ傾斜する。

**埴 丘** 上部を削平され、盛土は遺存していない。周溝部の内側、検出した墳丘部の規模は、南北5.0mを測る。

**埋葬施設** 主体部は確認できなかった。

**出土遺物** 遺物は出土していない。

#### SX06 (図版11・12 写真図版22)

**検出状況** 調査区中央部に位置する方形周溝墓である。北東側にSX05、南西側にSX07が隣接し南北周溝を共有する。西周溝は検出していないが、遺構の大半は調査したものと判断している。上部は削平されていたが、埋葬施設と周溝部が遺存していた。

**形状・規模** 長辺は北東-南西方向を向く。北・南・東周溝を検出し、規模は、南北は11.5mを測る。東西の規模は不明だが、南北周溝の西端がほぼ揃うことから、この付近に西周溝の存在を想定すれば、7.5m程度の規模を想定できる。なお、西周溝の想定位置はSX04・05西周溝の延長に合致する。

**周 溝** 北・南・東周溝を検出し、南周溝のみ完掘した。南と東の周溝は連続していない。北周溝はSX05南周溝と同一である。南周溝は幅1.2~1.8m、検出面からの深さ50cmを測る。底は起伏がなく平坦である。東周溝は、幅0.6m、検出面からの深さ10cm程度では平坦であるが、中央部付近は長さ約2.5mの範囲が掘り込まれ、深さ25cmとなる。

**埴 丘** 上部を削平され、盛土は遺存していない。周溝部の内側、検出した墳丘部の規模は、南北9.5mを測る。想定し合う東西の規模は、約6mである。

**埋葬施設** 南西寄りで木棺を埋置した主体部SK04を検出した。墓壙は北西-南東に主軸をもつ長方形を呈し、長さ1.9m、幅0.75m、検出面からの深さ14cmを測る。木棺は中央部に埋置され、長さ1.2m、幅0.4mを測る。主体部の位置が南に偏り、北半は空白であることから、本来は複数の埋葬が行われていた

可能性がある。

**出土遺物** 東周溝南半部で壺（63～65）、中央付近の掘り込み内から広口壺（66）が出土している。広口壺は西方向に口縁部を向け横倒した状態で出土し、周溝内に設置されていた可能性がある。

#### SX07（図版11・12 写真図版23）

**検出状況** 調査区中央部に位置する方形周溝墓である。北東側にSX06が隣接し北周溝を共有する。上部は削平され埋葬施設と周溝部のみが遺存していた。西周溝は検出していない。墳丘にあたる箇所では後世のものと推定する柱穴が掘り込まれている。

**形状・規模** 長辺は北東～南西方向を向く。北・南・東周溝を検出し、規模は、南北は6.3mを測る。東西の規模は不明だが、南北周溝の西端がほぼ揃い、北周溝西端はSX04西周溝やSX05・06南北周溝西端の延長にあたる。この付近に西周溝の存在を想定すれば、東西の規模は5m前後を想定できる。

**周溝** 北・南・東周溝を検出し、いずれも完掘した。周溝はコ字状につながっている。北周溝はSX06南周溝と同一である。南周溝は南隅部から約2.5m西へ延びて消滅する。幅0.5～0.8m、検出面からの深さ28cmを測る。底は起伏がなく平坦である。東周溝は、幅0.6～0.8m、検出面からの深さ20cm程度ではほぼ平坦であるが、東隅部近から西周溝へ向けて約60cm落ち込む。また南隅付近には60cm×30cmの平面長楕円形を呈する土坑状の掘り込みがあり、溝底からの深さ30cmを測る。

**墳丘** 上部を削平され、盛土は遺存していない。周溝部の内側、検出した墳丘部の規模は、南北4.8mを測る。想定する東西の規模は4m前後である。

**埋葬施設** 主体部は確認できなかった。

**出土遺物** 東周溝中央付近より壺（68・69）、東隅付近より壺（67）、無頸壺あるいは鉢（70）が出土している。後者についてはSX06に伴う可能性もあるが、明確にはしない。

#### SX08（図版13 写真図版23）

**検出状況** 調査区南半部に位置する方形周溝墓である。遺構の東半部のみ調査し、大半は調査区西側へ広がっている。南側にSX09が隣接する。北東側にSX07が所在するが約15m離れている。墳丘にあたる箇所には後世の柱穴が少數掘り込まれている。

**形状・規模** 東周溝は北東～南西方向を向く。北・東周溝を検出し、規模は、南北は少なくとも10m程度あるが、東西の規模は不明である。

**周溝** 北・東周溝を検出した。いずれも調査区外へ続いている。北・東周溝は東隅部で途切れ連続しない。北周溝は約2m検出した。幅0.4m、検出面からの深さ5cmを測る。底は起伏がなく平坦である。東周溝は、幅0.5～0.7m、検出面からの深さ20～30cmを測り底は起伏がある。

**墳丘** 上部を削平され、盛土は遺存していない。墳丘の規模は明らかにしえないが、南北は9m程度あるものと考える。

**埋葬施設** 主体部は確認できなかった。

**出土遺物** 東周溝中央付近から壺（71）、鉄斧状鉄製品（M2）が出土している。

#### SX09（図版13 写真図版23）

**検出状況** 調査区南半部に位置する方形周溝墓である。本遺構は南北方向の溝を1条検出したのみであ

るが、埋土の状態や弥生土器が出土することから周溝墓と判断した。南側は擾乱を受けている。他の遺構との重複はみられない。

**形状・規模** 南北にのびる溝を1条検出したのみで、全容は明らかにしえないが、地形から東側へ広がる可能性は低く、遺構は西に広がり、溝は東周溝になると考える。

**周溝** 検出長5m、幅0.7mを測り両端ともに調査区内で収束する。検出面からの深さ15cmで底は平坦である。

**墳丘** 上部を削平され、盛土は遺存していない。

**埋葬施設** 主体部は確認できなかった。

**出土遺物** 周溝北端より広口壺(72)、壺(73)が出土した。

#### SX10 (図版13 写真図版23・24)

**検出状況** 調査区南端に位置する方形周溝墓である。弧状の溝1条を検出した。埋土の状態や弥生土器が出土することから周溝墓と判断した。SX09とした周溝と一緒になる可能性もあるが、明らかではないため、別の遺構として取り扱う。北側は擾乱を受けている。他の遺構との重複はみられない。

**形状・規模** 全容は明らかにしえないが、地形から東側へ広がる可能性は低く、遺構は西に広がり、溝は東周溝の南隅付近になると考える。

**周溝** 南西から北へ弧状に延びる。幅1.7mを測る。検出面からの深さは約60cmで底はほぼ平坦である。この溝の北側に幅0.4m、検出面からの深さ10cmの溝を取り付くが擾乱のため同一の周溝として統くのかは明らかにしない。

**墳丘** 調査区外になるため不明だが、他の周溝墓同様に上部を削平され、盛土は遺存していないものと考える。

**埋葬施設** 主体部は確認できなかった。

**出土遺物** 埋土内から多量の弥生土器が出土した。いずれも破片であり完形のものではなく、出土層位も埋土中位であることから、墳丘に置かれたものが流入したと考える。

#### 2. 土器棺墓

##### SX11 (図版14)

**検出状況** 調査区の北半部、SX01西隅の南西側に位置する土器棺墓である。西側に土器棺墓SX12が並ぶ。後世の擾乱の影響を受けていたが埋葬容器である広口壺が遺存していた。

**形状・規模** 墓壙は平面が不整形円形を呈し径0.5mを測る。検出面からの深さは8cmである。埋葬容器である広口壺は墓壙の底部に直立に近い斜位に埋設されている。

**出土遺物** 広口壺(60)が出土している。

##### SX12 (図版14)

**検出状況** 調査区の北半部、SX01西隅の南西側に位置する土器棺墓である。東側に土器棺墓SX11が並ぶ。後世の擾乱の影響を受けていたが埋葬容器である広口壺が遺存していた。

**形状・規模** 墓壙は平面が梢円形を呈し南北0.55m、東西0.6mを測る。検出面からの深さは20cmである。埋葬容器である広口壺は横位に埋設されている。

**出土遺物** 広口壺（61）が出土している。

### 3. 木棺墓

SK01（図版15）

**検出状況** 調査区北半部、SX01・02間に位置する。後世の柱穴と重複し、本遺構が切られている。

**形状・規模** 墓壙はほぼ東西方向に主軸をもち、平面形が隅丸長方形を呈する。長さ1.5m、幅0.8m、検出面からの深さ35cmを測る。明瞭な木棺の痕跡は確認できなかったが、墓壙の形態から木棺墓と推定した。

**出土遺物** 遺物は出土していない。

SK03（図版15）

**検出状況** 調査区中央部、SX04・05間に位置する。削平の影響が大きく底部のみ残存する。他の遺構との重複はみられない。

**形状・規模** 墓壙はほぼ東西方向に主軸をもち、平面形が長方形を呈する。長さ1.4m、幅0.9m、検出面からの深さ6cmを測る。削平のため明瞭な木棺の痕跡は確認できなかったが、墓壙の形態から木棺墓と推定した。

**出土遺物** 遺物は出土していない。

### 4. 捩立柱建物跡

SB01（図版15 写真図版24）

**検出状況** 調査区中央部の西壁際で検出した。大半は調査区西側へ広がる。他の遺構との重複はみられない。

**形状・規模** 東西1間以上×南北3間以上の個柱建物として復元できるが、大半は調査区西側にのびるため、全容は不明である。南北方向の偏りはN32°Eを示す。検出できた規模は東西2m、南北5.1mを測る。柱穴间距離は桁行が1~1.2m、梁行が1.6mである。

**柱 穴** 柱穴は平面形が円形または梢円形を呈し、規模は径30~50cmである。検出面からの深さは20~40cmである。

**出土遺物** 遺物は出土していないが、周辺から出土した遺物から中世に属するものと考える。

## 第3節 出土遺物

出土遺物は、土器、金属器がある。土器は須恵器鉢1点を除いて全て弥生土器である。

SX01出土遺物（図版24 写真図版35）

51・52は広口壺である。口縁部は下方に抵張し端面には51が凹線・棒状浮文、52は凹線・竹管文付円形浮文を施る。51は頭部に少なくとも4条の凹線文を施す。59は底部である。

SX02出土遺物（図版24 写真図版35・39）

53・54はく字形の口縁部をもつ壺である。53の外面はタテハケで煤が付着する。54は口縁部を肥厚させ端部に面をみたせ、1条の凹線を巡らせる。55は直口壺であろう。器壁表面が剥離し施文は確認でき

ない。56は広口壺である。口縁部を上下に拡張し端面には凹線・棒状浮文を飾る。頭部には凹線を3条並らせ突帯状に、体部上半には直線文・波状文を飾る。57・58は底部である。57の内面にはタテケズリがみられる。

**SX04出土遺物** (図版26 写真図版36)

62は壺である。口縁部を体部からく字に屈曲させ、端部をつまみ上げる。体部はタテハケで下半部に疊らにミガキがみられる。

**SX06出土遺物** (図版26 写真図版36・37)

63～65は壺である。口縁部を体部からく字に屈曲させる。63は口縁端部をやや肥厚させ端面に刻みを施す。体部外面はタテハケ、内面は口縁部付近までケズリを行う。64は口縁端部をやや肥厚させる。体部外面はタテハケ。65は口縁端部をつまみ上げ端面に2条の凹線文と部分的に刻みを施す。体部外面はタテハケ、内面は継または斜め方向のハケ調整。66は広口壺である。口縁部は端部を上下に拡張し端面には凹線・棒状浮文を飾る。頭部には3条の凹線文を施す。体部上半から頭部にかけて直線文・波状文を飾る。体部上半と下半の境界付近は横方向、下半は継方向のミガキを行う。

**SX07出土遺物** (図版26・27 写真図版37・39)

67は壺である。口縁部を体部からく字に屈曲させ、端部をつまみ上げる。端面には凹線を施す。体部外面は粗いタテハケ、内面は斜め方向のハケ調整。68は壺体部である。内外面ともタテハケ。69は壺である。口縁部を体部からく字に屈曲させ、端部をつまみ上げる。端面には凹線を施す。体部外面は粗いタテハケ、内面は斜め方向のハケ調整。70は無頭壺あるいは鉢である。口縁部は内傾する。外面を凹線文・棒状浮文で飾り、その下に直線文がみられる。

**SX08出土遺物** (図版27 写真図版37・38・40)

71は壺である。口縁部を体部からく字に屈曲させる。体部外面は斜め方向のハケ調整、内面は上半が横方向、下半が縦方向のケズリ。

M.2は遺存状態が不良だが、残存する規模は、長さ6.2cm、幅3.6cmを測る。厚さは0.3cmの板状を呈する。形状から鉄斧と考える。

**SX09出土遺物** (図版27 写真図版37・38)

72は広口壺の口縁部である。外反し端部は拡張する。73は球状を呈する壺体部である。外面に斜め方向のハケ調整がみられる。

**SX10出土遺物** (図版27・28 写真図版37・38・40)

74～78は壺である。口縁部を体部からく字に屈曲させ、端部を上方につまみあげる。76は端面を凹線2条で飾る。体部は、74・76は外面をタテハケ、内面は上半まで縦方向のケズリ。77は外面をタテハケ、頭部付近を横方向のハケメ。79は壺底部である。外面をタテハケ、内面は縦方向のケズリ。80は広口壺である。体部から頭部が直立し外反させ口縁部にいたる。口縁端部は下方に拡張し、端面に4条の凹線文を施す。口縁部内面には扇形文を2段施す。頭部には4条の凹線、体部上半には直線文・波状文を交互に施文する。81は水差把手である。82は無頭壺あるいは高杯の脚部である。脚部外面は縦方向のミガキ。裾部内面は横方向のヘラケズリ。

**SX11出土遺物** (図版25 写真図版35)

60は広口壺である。全体的な形態は不明だが球状の体部から頭部が直立し、口縁部が短く外反する。底部は短く突出し体部と底部の境界付近に焼成後穿孔を施す。体部上半は外面をタタキ後ナデで仕上げ、

下半はタテ方向のミガキ、内面はヨコハケの後丁寧にナデる。

#### SX12出土遺物（図版25 写真図版35）

61は広口壺である。口縁部を欠く。体部は球状を呈し頸部が外開きぎみに立ち上がる。底部は尖りぎみである。頸部と体部の境界には断面三角形の突帯を貼り付け、端部に刻み目を施す。体部外面は下半部を除いてタタキの後に縱または斜め方向にミガキを施す。

#### 包含層出土遺物（図版28 写真図版40・44）

83は須恵器鉢である。口縁端部をつまみ上げ端面をなす。M3、M4は鉄釘であり、断面方形を呈する。M3は近世以前、M4は近代以降のものであろう。100は所謂軍隊食器と呼称されるものである。

## 第4節 小 結

本遺跡は谷と丘陵にはさまれた狭い範囲ではあるものの、ほぼ全域に10基の方形周溝墓が分布し、周溝墓の周囲で土器棺墓、木棺墓を検出した。検出した遺構から遺跡は弥生時代中期末の墓域と考える。

方形周溝墓の大半は南北に主軸をもつ平面長方形を呈する。墳丘南北方向の規模はSX05・07が5m前後である他は、10m前後を割る。周溝は中央付近が深く、隅部は一部を除いて浅くなるか、途切れる傾向にある。南・北周溝は規模も大きく周溝を共有する例もある。一方、東・西周溝は小規模である。

概ね南北方向に3、4基が並ぶ傾向が看取でき、これを群とみることができる。

1群：SX01・02・03

2群：SX04・05・06・07

3群：SX08・09・10

各群内には少なくとも1基10m超の周溝墓が所在する。このうち1群は遺跡内の最高所に所在し、全て10m超の周溝墓で構成され、SX03は遺跡内最大規模である。3群については調査区の制約から不明な点も多いが、周溝の規模や出土遺物量からSX10が群を代表するものと考える。

出土遺物は大半が破片で、溝底より浮いた状態で出土している。このことから、遺物の中で周溝内に設置された可能性のあるものはほとんどないと考えている。おそらく墳丘上に設置されたものが被損し、盛土が流出した際に周溝内に流入したと推定される。1基の周溝墓には数個体の壺と1個体程度の壺がセットで置かれていたことが推定される。壺は口縁端部を抵張し端面に凹線文で飾るものがある。広口壺は口縁端部を拡張し端面に凹線文や浮文で加飾し、頸部にも凹線文を施す。これらの特徴から、土器は中期後半（IV期）に位置づけられると考える。壺については丹波地域の特徴をもつものの、広口壺はその特徴から播磨地域からの影響を考えることができる。

周溝墓群を面的に調査した七日市遺跡（丹波市）では階層差をもった複数の周溝墓群が形成されている。本遺跡でも周溝墓の大小や、群の格差が見られる。周溝墓外には土器棺墓、木棺墓があり同様の傾向がうかがえる。木棺墓はいずれも周溝墓に割り込むような位置にあり、集落内の社会構成の複雑化を示しているのかもしれない。

七日市遺跡と同じ篠山盆地内の車塚の坪遺跡では周溝墓群に隣接して同時期の居住域が確認されている。本調査区内や隣接する西岡屋遺跡、柴崎遺跡とともに弥生時代中期末の集落跡は確認されていないが、隣接して未周知の弥生時代集落遺跡が存在する可能性は高いと考えている。土器からは播磨地域との交流がうかがえ、鉄器を所有することからも篠山盆地内でも拠点的な集落の1つであると考える。

## 第5章 柴崎遺跡の調査

### 第1節 遺跡と調査の概要

柴崎遺跡は、古代多紀郡の中核部と想定される都家地区に隣接し、付近は古代山陰道の推定ルートとなっている。事業化前は道路に面して民家等が建ち、その影響で調査区内には便所跡や井戸跡などの攪乱が点在する。宅地化により盛土がなされているが、盛土以下は砂礫を主体とした低湿な堆積層であり、以下、クロボク層、遺構検出面である基盤層となる。地形は北端付近を最高所として北側から南側に向かって緩やかに傾斜するが、基盤層は北側に向かうにつれて含まれる河川堆積に起因する礫の割合は少なくなり、安定した黄褐色のシルト質極細砂へと変化していく。検出した遺構は主に溝であるが、このうち北半部のものは弧状を呈し、出土遺物などから円形周溝墓と判断した。

調査は平成23年度に1～3区について行ったが、事業対象地内で遺構が延びることが明らかとなった箇所や未買取地については平成24年度に4～7区として本発掘調査を行った。

西側に離れた4区は調査の結果、耕すないし盛土以下基盤層に至るまでの間は低湿な堆積状況が認められ谷部を形成することが明らかとなった。地形は東側から西側に向かって緩やかに傾斜し、東端の最高所から西側の自然流路NRO1底部までの高低差は85cmを測る。基盤層の上面は3・6・7区付近の遺構検出面と同一面と考えられるが、より河川堆積に起因する礫の含まれる割合が高くなる。基盤層の上部を覆う谷埋土からは、小片のため図化していないが稜腕の蓋や壺胴部と思われる須恵器片、弥生土器片が出土している。

### 第2節 遺構

#### 1. 土 坑

SK01

検出状況 調査区南半部の谷部への傾斜変換点付近で検出した。

形状・規模 平面形は東西方向に主軸をもつ楕円形を呈し、長径1.3m、短径1.0m、検出面からの深さは10cmを測る。

出土遺物 埋土内から須恵器杯蓋（84・85）が出土した。

#### 2. 溝・溝状遺構

SD01（図版20 写真版30）

検出状況 調査区南半部、谷部への傾斜変換点付近で検出した。当初1・2区で検出していったが、両調査区間に5区として調査し完掘した。一部後世の擾乱の影響を受けている。

形状・規模 北東から南西方向に緩やかに蛇行しながら延びる。検出長14mである。南端は傾斜変換点付近となる段差、北側は幅を減じて調査区内で終結する。比較的残存状況の良好な南半部は、幅1.5m、検出面からの深さ30cmを測る。

埋 土 下層には砂礫が堆積するが、最終的には灰シルトにより埋没する。

出土遺物 埋土内から弥生土器甌（86・87）、底部（88）が出土している。

#### SD02・03・04 (図版20 写真図版30)

**検出状況** 調査区北端で検出した溝である。当初はSX01に隣接することから周溝墓の一端と想定したが、7区の調査によりSD02は旧水路、SD03・04は溝としているが自然流路の一部であることが明らかとなった。

**形状・規模** 調査区の制約から全容は明らかにしえないが、いずれの溝も南北方向に延びると考える。

断面は浅いU字状を呈する。

**埋 土** SD03は黒褐色シルト、他は灰シルトを埋土としグライ化する。

**出土遺物** 国化しえなかつたが、SD03の埋土から弥生土器片が出土している。

### 3. 円形周溝墓

#### SX01 (図版21 写真図版29)

**検出状況** 調査区北半部に位置する円形周溝墓である。上部は著しく削平され周溝の底を検出したに過ぎない。2・3区にまたがって検出し、後に両区の間を6区として調査した。これにより周溝墓の東半部は完掘した。西半部は調査区西側へ続く。

**形状・規模** 周溝を含めた規模は南北21.2m、東西14m以上である。

**周 溝** 少なくとも調査区内では全周している。幅は南側で約4m、北側で5.5m、突出部を有する東側は約6mを測る。削平により溝底付近しか残存しないが、断面は皿状を呈し、検出面からの深さは15cm前後である。黒褐色シルトを埋土とするが、部分的に粗砂や細礫が堆積する箇所がある。

**墳 丘** 上部を削平され、盛土は遺存していない。周溝内側、墳丘部の規模は確認しうる箇所で14.5mである。東側は突出部を有し、長さ約1m、幅約5mの方形形状に張り出す。

**埋葬施設** 削平のため主体部は確認できなかつた。

**出土遺物** 周溝南西部付近の埋土内より縁に混じて甕(89)、壺(90・91)、高坏(92)、甕の体部(93)、穿孔のある甕底部(94)などの弥生土器片がまとまって出土している。

### 4. 旧流路

#### SR01 (図版19 写真図版28)

**検出状況** 4区西半部で検出した。西側は調査区外西側に及ぶ。

**形状・規模** 検出幅5.8m、東肩付近の検出面からの深さ50cmを測る。

**埋 土** 中砂～細礫を主体とする。

**出土遺物** 遺物は出土していない。

## 第3節 出土遺物

#### SK01出土遺物 (図版29 写真図版41)

84・85は須恵器杯蓋である。頂部と口縁部の境界が不明瞭である。頂部はヘラ切りでその他は回転ナデで仕上げる。

#### SD01出土遺物 (図版29 写真図版41)

86・87は体部からく字に口縁部が屈曲する弥生土器甕である。86は端部に面をもつ。体部の外面はタケハケによりタタキの痕跡を消す。内面は横方向のヘラケズリ。87は端部を上方につまみ上げ、端面に

2条の凹線を施す。体部外面はタテハケ、内面は横方向のヘラケズリ。88は突出する底部である。内面は放射状のハケ調整。

#### SX01出土遺物（図版29 写真図版42）

89は体部からく字に口縁部が屈曲する弥生土器甕である。端部に面をもつ。90・91は小片であるが、弥生土器甕であろう。90は大きく聞く口縁部で端部をつまみ上げる。91は二重口縁甕であろう。口縁部が大きく外傾し、外面はミガキで仕上げる。92は弥生土器高杯である。杯体部から稜線をもって口縁部が外反する。93は弥生土器甕の体部である。丸みのある体部からく字に口縁部が屈曲する。外面は板ナデ、内面は横・斜め方向のケズリ。94は弥生土器甕底部である。焼成前に穿孔する。

#### 包含層出土遺物（図版29 写真図版42）

95は須恵器杯身である。扁平な形状で、受け部は短く内傾する。96・97は須恵器甕である。体部外面は縱方向のタキの後カキ目を施す。口縁端部は、96はつまみ上げて拡張、97は肥厚させる。98は蓋である。99は把手である。

## 第4節 小 結

調査区の地形は、7区北東部が最も高く、南側に緩やかに傾斜するほか、西側に谷部が存在し跡道の範囲が途切れることで明らかになった。検出した遺構・遺物は少ないが、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良時代の遺物が複数出土しており、付近に未周知の集落が存在するものと考えられる。

調査区内の最高所から緩斜面への変換点付近で円形周溝墓を1基検出した。周囲では溝や溝状遺構が検出され、他にも周溝墓の存在を想定していたが、追加の調査により円形周溝墓の周溝である可能性が低くなり、現在までのところ周囲に他の円形周溝墓の存在する積極的な根拠は認められない。

SX01は、埴丘規模が14.5mと大形で、幅の広い突出部を有する特徴がある。また南周溝内では複数の礫が検出され、埴丘に貼石がなされていた可能性がある。ただし、礫の検出数は少なく、北側周溝では検出していない。貼石については礫が原位置を保っていないため箇別の域を出ないが、行っていたとしても埴丘裾からでなく盛土以上の部分に施し、埴丘全面ではなく南から南西側の一部、つまり地形の低位から視覚的効果を狙ったものではないかと推定する。

遺物の出土状況は良好ではないが、二重口縁甕の存在などから弥生時代後期～終末期の時期を想定する。円形周溝墓については、中期の段階では播磨に分布の主体があったが、後期に入ると播磨へ移行するとともに内陸部の但馬・丹波へも広がりをみせる。また埴丘の規模や形態は、後期に入ると大型化、陸橋部の設置がみられる。SX01は陸橋部こそないが、突出部を有し、後期以降の特徴を有している。内陸部へ円形周溝墓が波及していく中にSX01もあったのであろう。

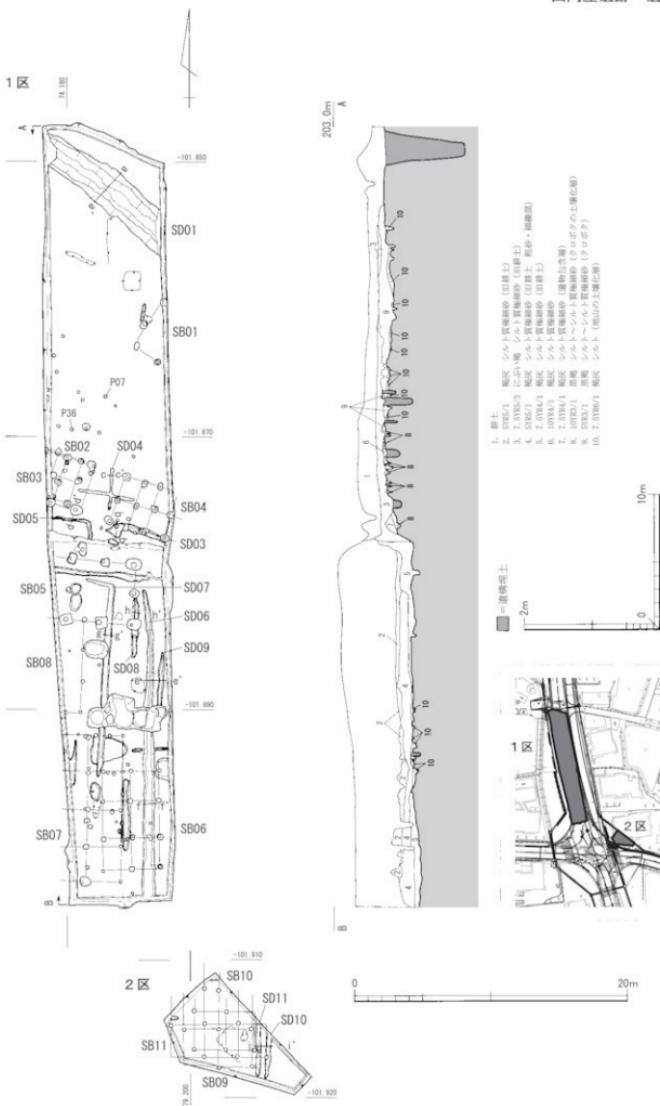
SD01からの遺物の出土をみると、付近にSX01と同時期の居住域があったものと考えられる。丹波地域では弥生時代後期に入ると埴墓が丘陵上に築造される傾向にあるが、本遺跡のように低地に埴墓を築造する集団もあり、墓制を異にする複数の集団が盆地内に所在していたことがうかがえる。隣接するヤケヤノ坪遺跡の方形周溝墓を築造した集団との関係は明確でないが、当地域は中前期以降播磨地域からの強い影響があったことが推測できる。ただし単独の円形周溝墓を築造する集団と大小の埴墓が混在する墓域をもつ集団とは、連続性をもち墓域を柴崎遺跡に移動させたと考えるよりも、両者は系譜の異なる集団と考える方が妥当ではないだろうか。

## 報告書抄録

ふりがな	にしおかやいせき・やけやのつばいせき・しばさきいせき						
書名	西岡屋道跡・ヤケヤノ坪道路・柴崎道跡						
著者名	長安寺西岡屋線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	長崎県文化財調査報告						
シリーズ番号	第483号						
編著者名	長浜誠司						
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部						
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内）TEL 079-437-5561						
発行機関	長崎県教育委員会						
所在地	〒850-8567 兵庫県神戸市中央区下山通5丁目10番1号 TEL 078-362-3284						
発行年月日	平成28(2016)年3月25日						
所取道路名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間 (道路調査番号)	調査面積 (m <sup>2</sup> )	発掘原因
		市町村 道番号					
西岡屋道跡	28221 西岡屋 道跡 ：830602 柴崎 道跡 ：829921 柴崎 道跡 ：830920 ヤケヤノ坪 道跡 ：830920	35° 4' 42" 135° 12' 5" 35° 4' 48" 135° 12' 7" 35° 4' 56" 135° 12' 10" 35° 4' 57" 135° 12' 10" 35° 4' 50" 135° 12' 7" 35° 4' 50" 135° 12' 7"	20110604～20111013 (2011001) 20110604～20111013 (2011002) 20110604～20111013 (2011003) 20120806～20120808 (2012002) 20121019～20130325 (2012156) 20130522～20130523 (2013038)	802m <sup>2</sup> 693m <sup>2</sup> 1,203m <sup>2</sup> 230m <sup>2</sup> 248m <sup>2</sup> 16m <sup>2</sup>		記録保存 調査	
ヤケヤノ坪道跡							
柴崎道跡							
柴崎道跡							
ヤケヤノ坪道跡							
ヤケヤノ坪道跡							
所取道路名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
西岡屋道跡	集落	古代・中世	掘立柱建物跡・溝	須恵器・土師器・瓦器・土馬		古代の遺構は多紀都 衛に属する施設の 一部	
ヤケヤノ坪道跡	墳墓	弥生時代	方形周溝墓	弥生土器・鉄斧状鉄製品		弥生時代中期末の墓 域	
柴崎道跡	墳墓	弥生時代後期	円形周溝墓・溝	弥生土器・須恵器		弥生時代後期の墳墓	
要約	西岡屋道跡、ヤケヤノ坪道跡、柴崎道跡は丹波盆地中央部の篠山川北岸に所在する道路である。調査区東側には「郡家」地名が残り、古墳時代中期の大型円墳が所在するなど古代多紀郡の中心地であったと想定される地域である。西岡屋道跡は掘立柱建物跡1棟が復元された。このうち5棟は古代に属するものである。建物の方位はほぼ南北を示すものと東に偏るものがある。前者の方角は中国の風水の杜建物跡と同じであり、この地域の地割が古代までさかのほ可能である。また古代から官能的な遺物が出土し、都府開闢施設が所有するものと想定される。中世の掘立柱建物跡も6棟検出し、裏表するところから継続した居住が見られる。ヤケヤノ坪道跡では方形周溝墓を複数検出する。墓には被葬者と陪葬品が埋葬され、出土遺物には漆器の鋳型のあと土器、金屬器があり、金銅鏡の鋳型の跡となる。また、土器には縦縫目付土器が多く、縫目付土器では弥生時代後期から奈良時代初期にかけて存在する。奈良時代初期では弥生時代後期から奈良時代初期にかけて存在する。奈良時代中期になると縫目付土器は減少する。土器の上部に瓦器が付いていた複数の窓跡が存在していたことを示す資料となる。また、土器の上部に瓦器が付いていた複数の窓跡が存在していることから少なくとも、弥生時代中期以前のこの地域に継続して集落が存続していることが想定される。						

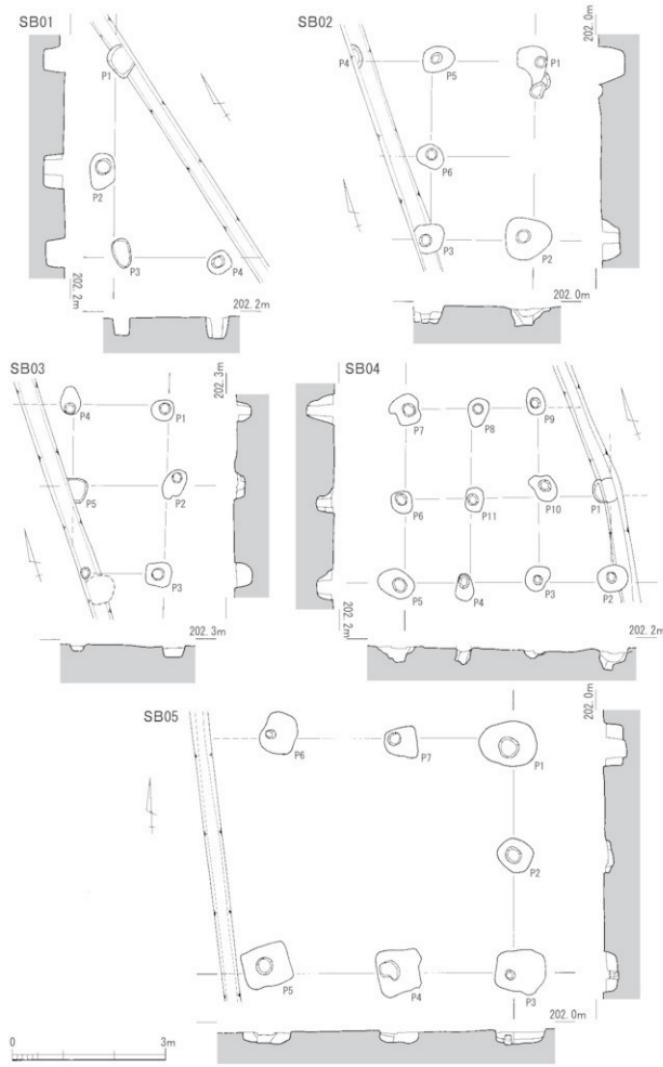
# 図 版



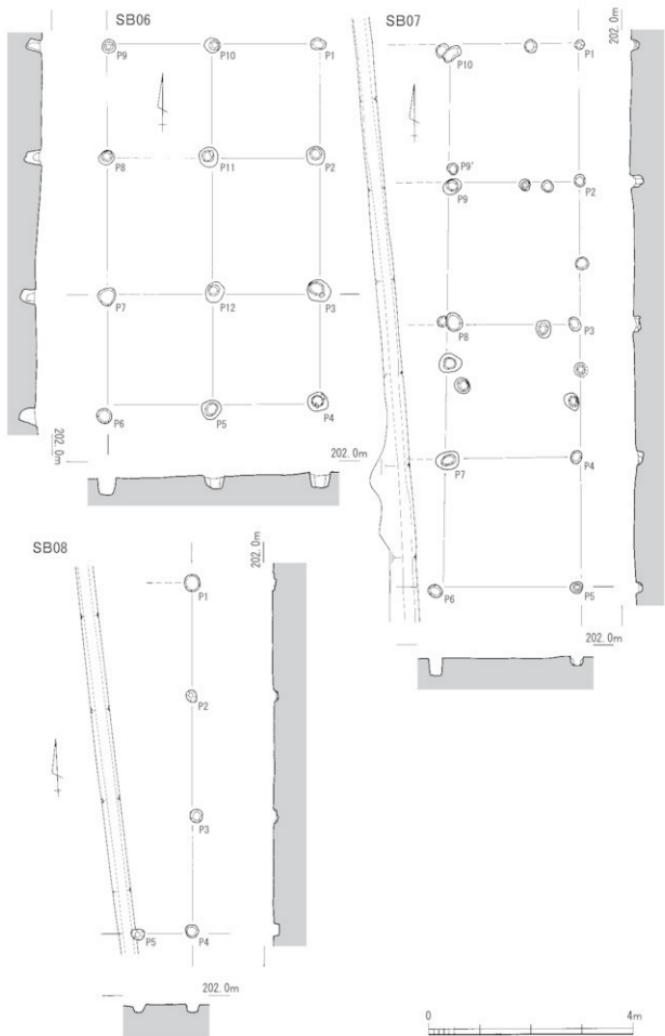


調査区全体図・断面図

図版2 遺構 西岡屋遺跡

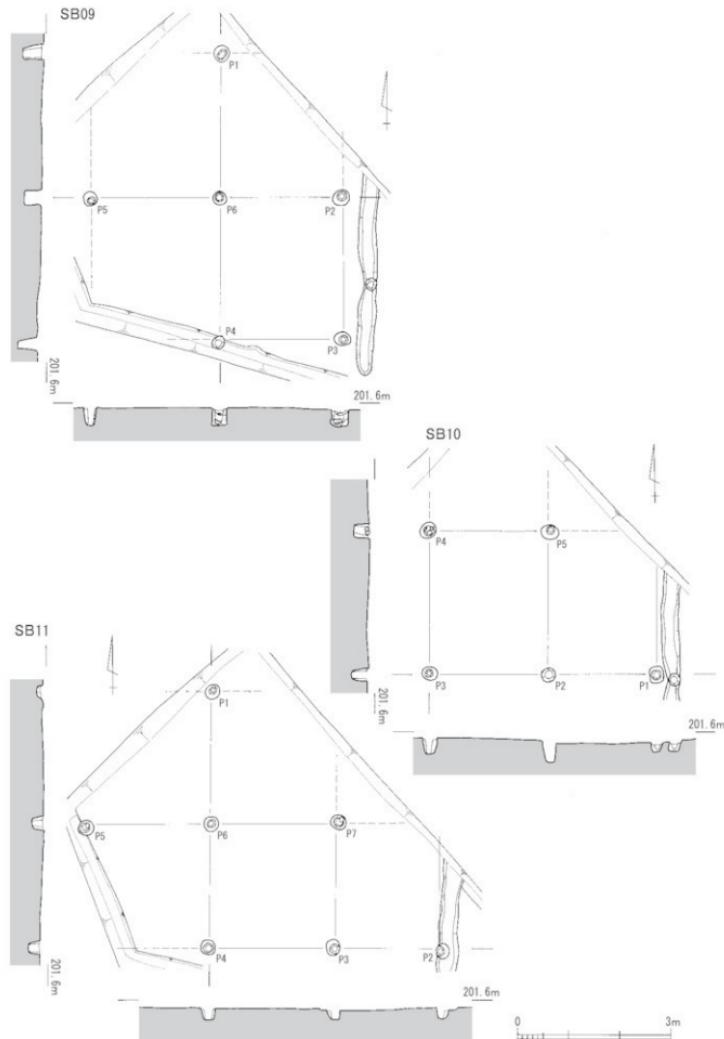


掘立柱建物跡 1

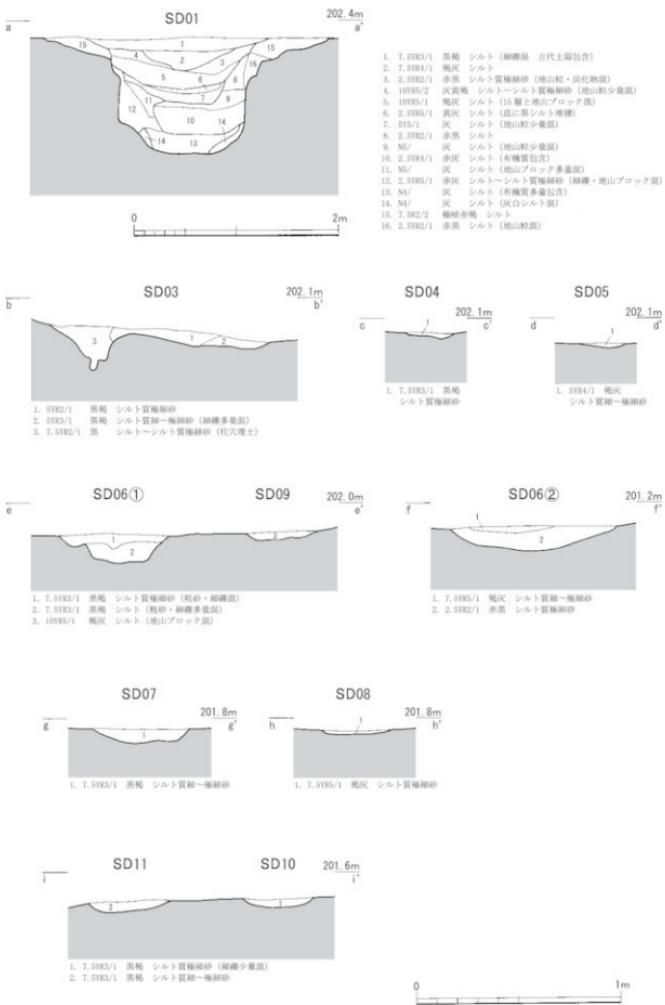


掘立柱建物跡 2

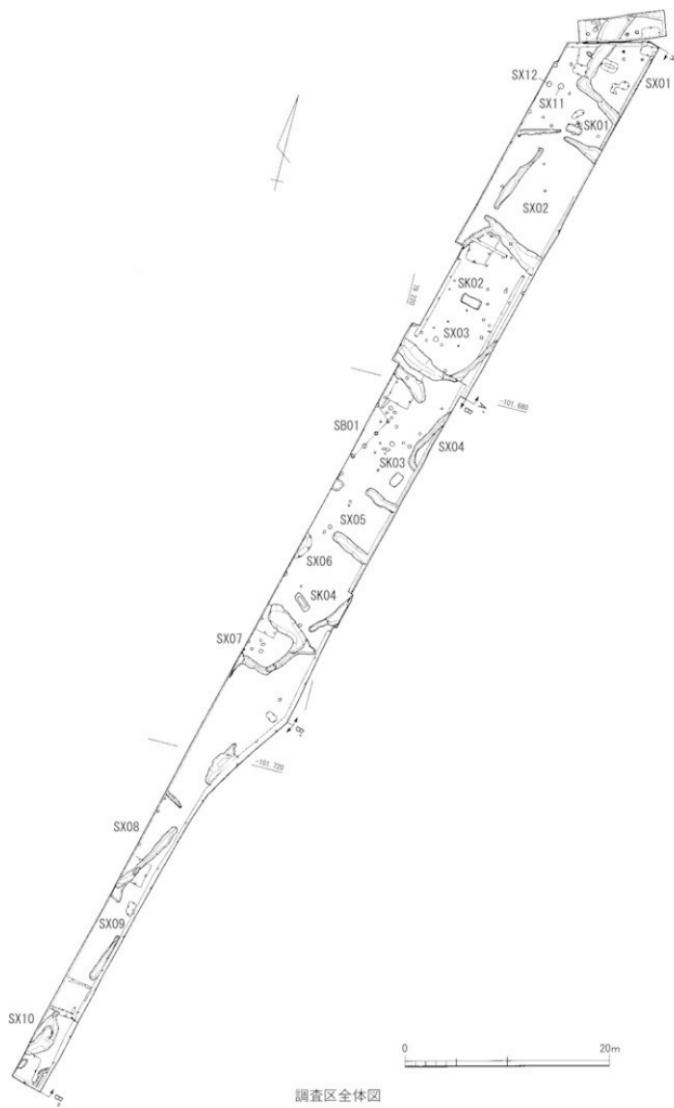
図版4 遺構 西岡屋遺跡



掘立柱建物跡 3



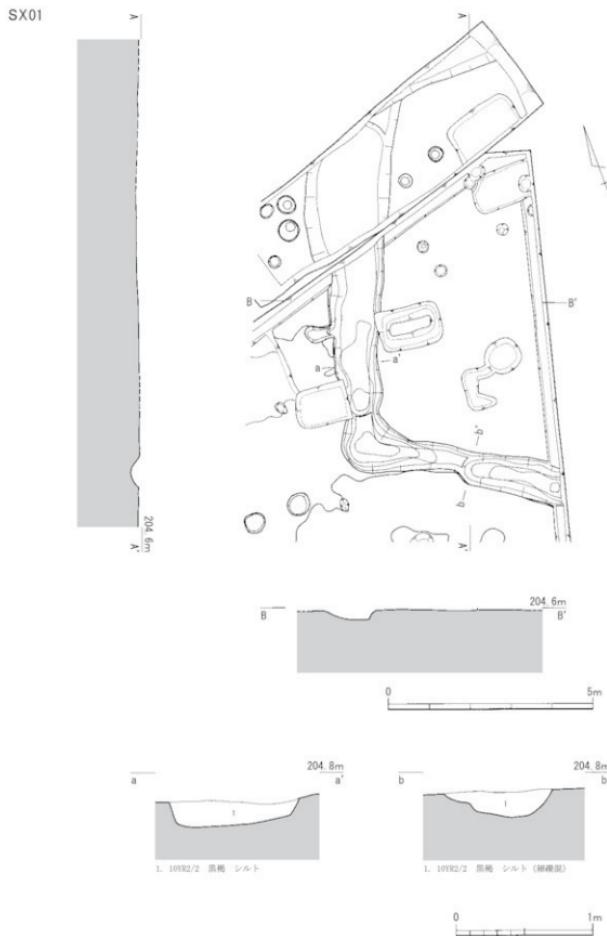
図版6 遺構 ヤケヤノ坪遺跡





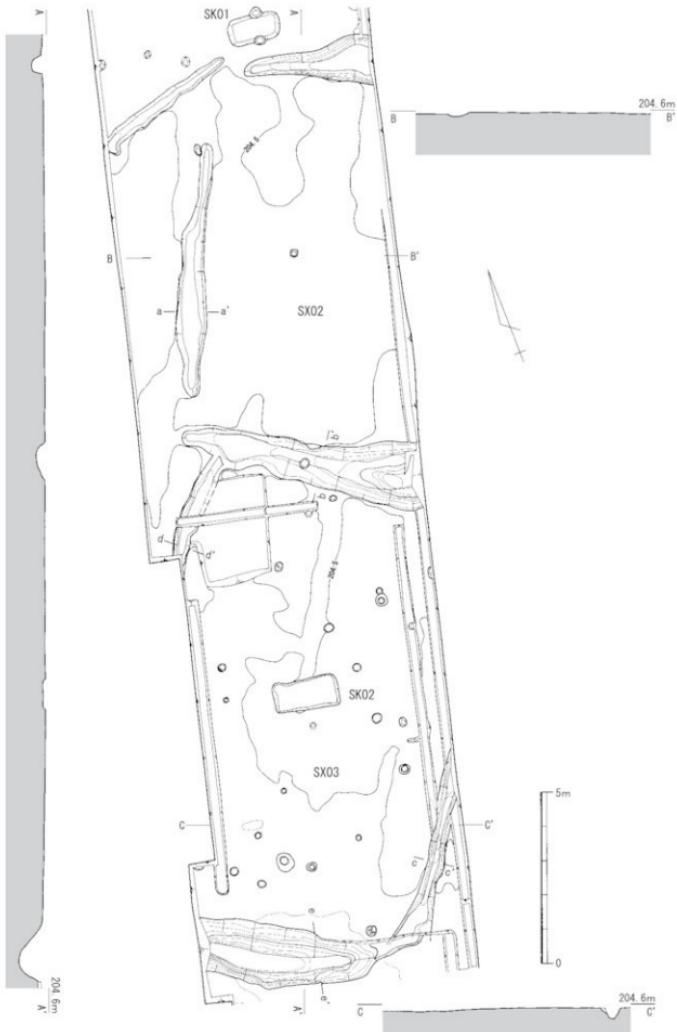
調査区断面図

図版8 遺構 ヤケヤノ坪遺跡



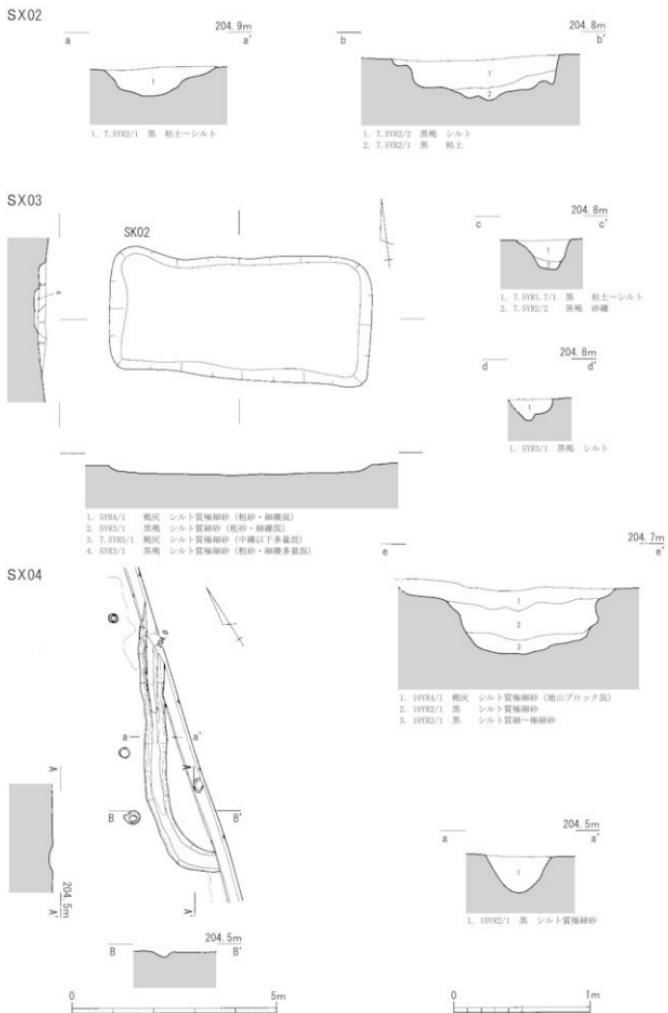
方形周溝墓 1

SX02 • 03



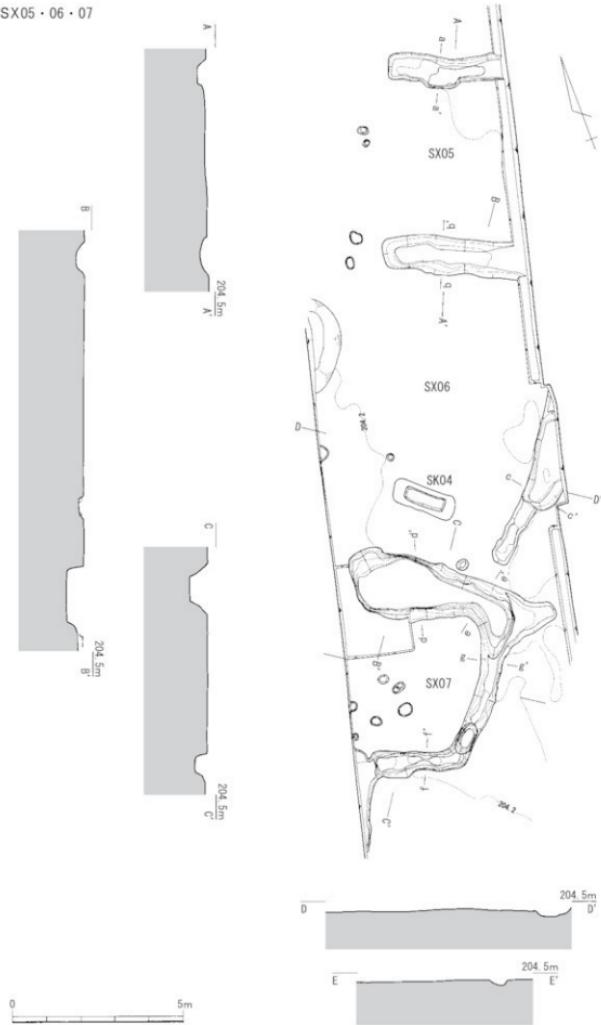
方形周溝墓 2

図版10 遺構 ヤケヤノ坪遺跡



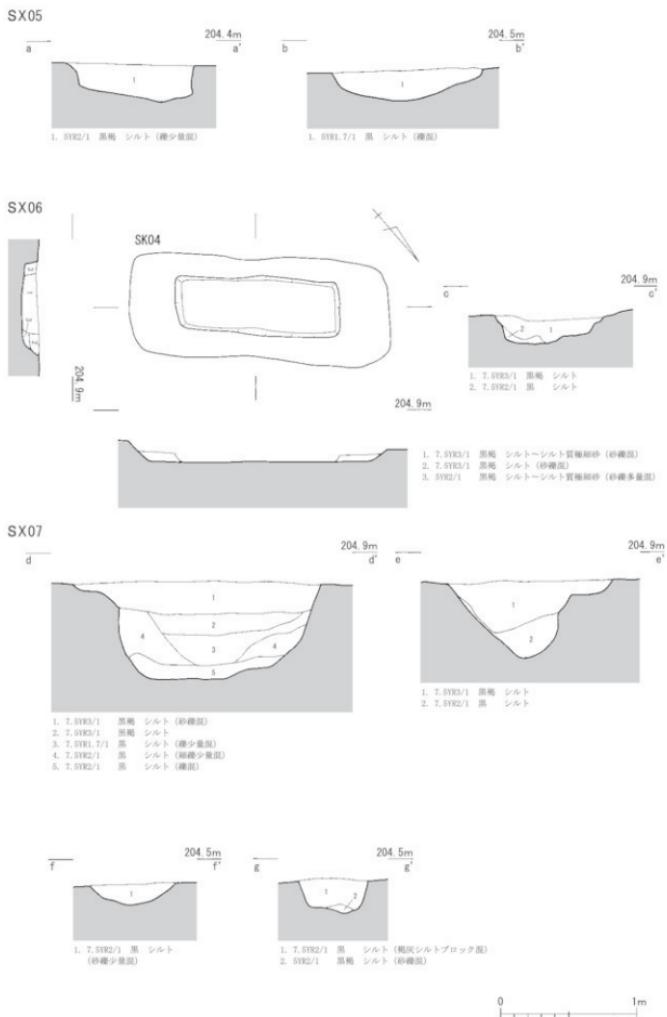
方形周溝墓 3

SX05 · 06 · 07

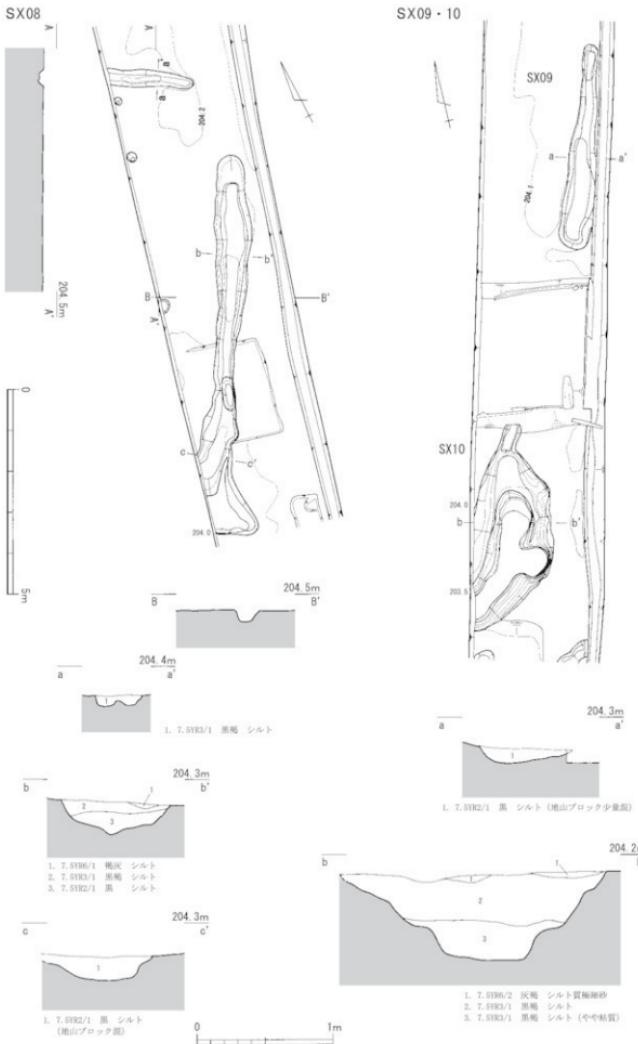


方形周溝墓 4

図版12 遺構 ヤケヤノ坪遺跡



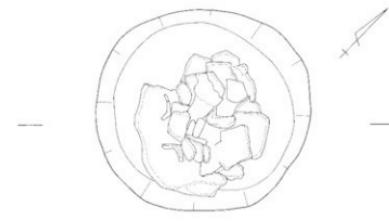
方形周溝墓 5



方形周溝墓 6

図版14 遺構 ヤケヤノ坪遺跡

SX11



204.6m



SX12



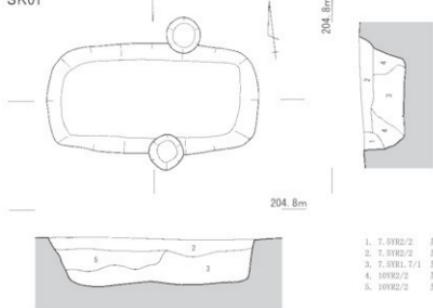
204.6m



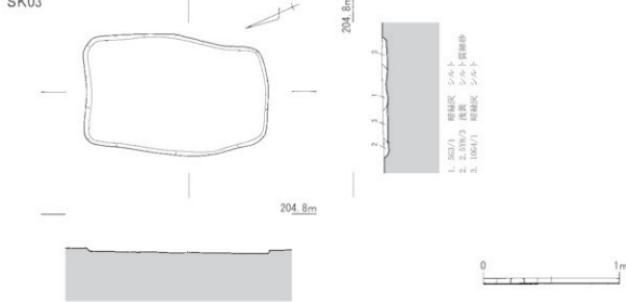
0 50cm

土器棺墓

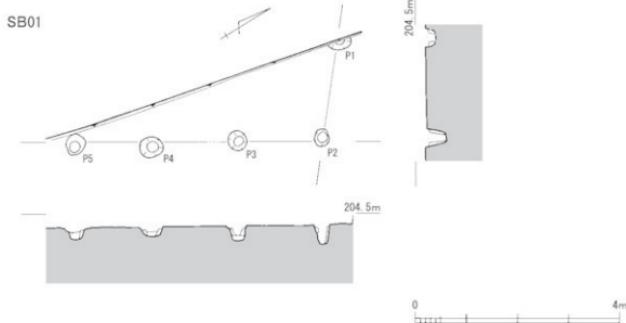
SK01



SK03

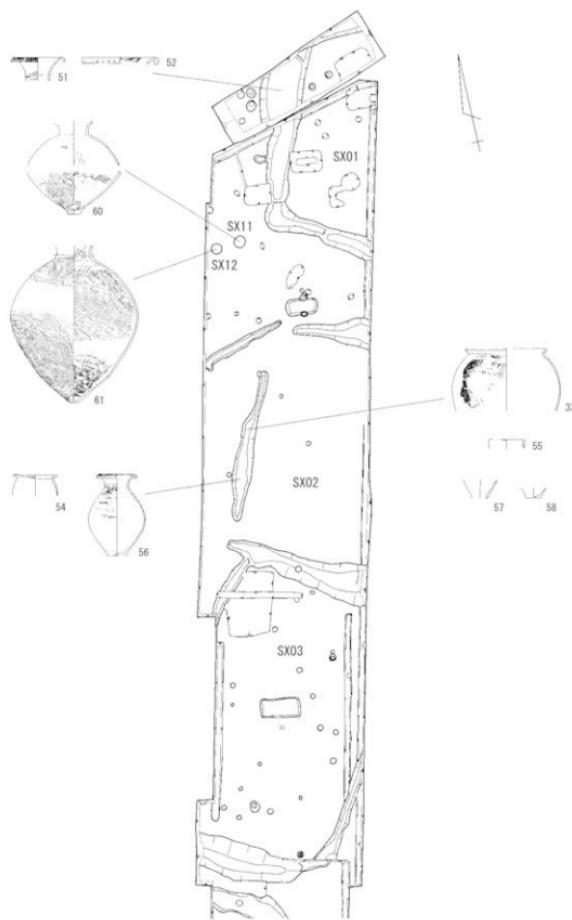


SB01

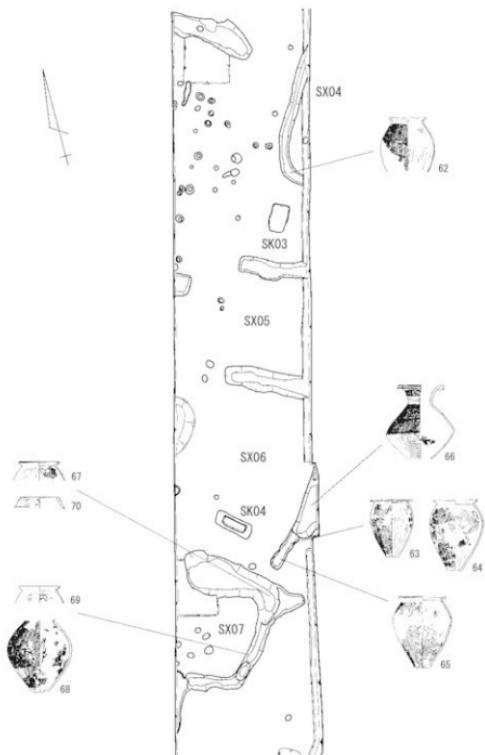


土壤墓・掘立柱建物跡

図版16 遺構 ヤケヤノ坪遺跡

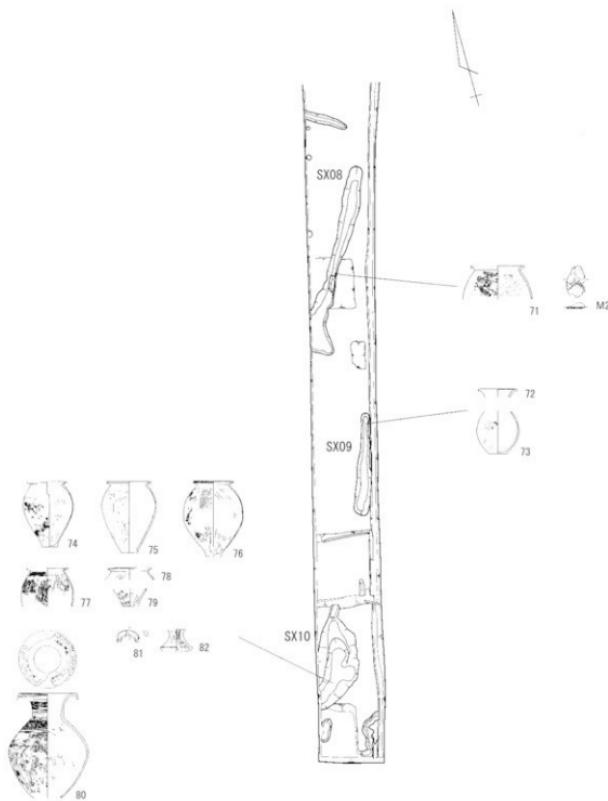


遺物出土状況 1

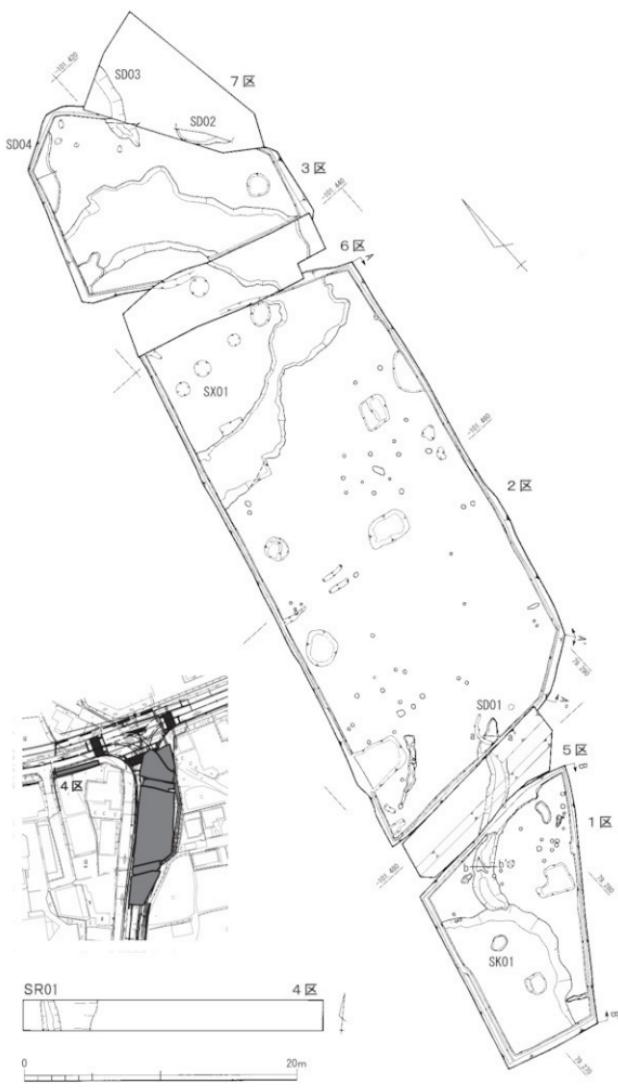


遺物出土状況 2

図版18 遺構 ヤケヤノ坪遺跡

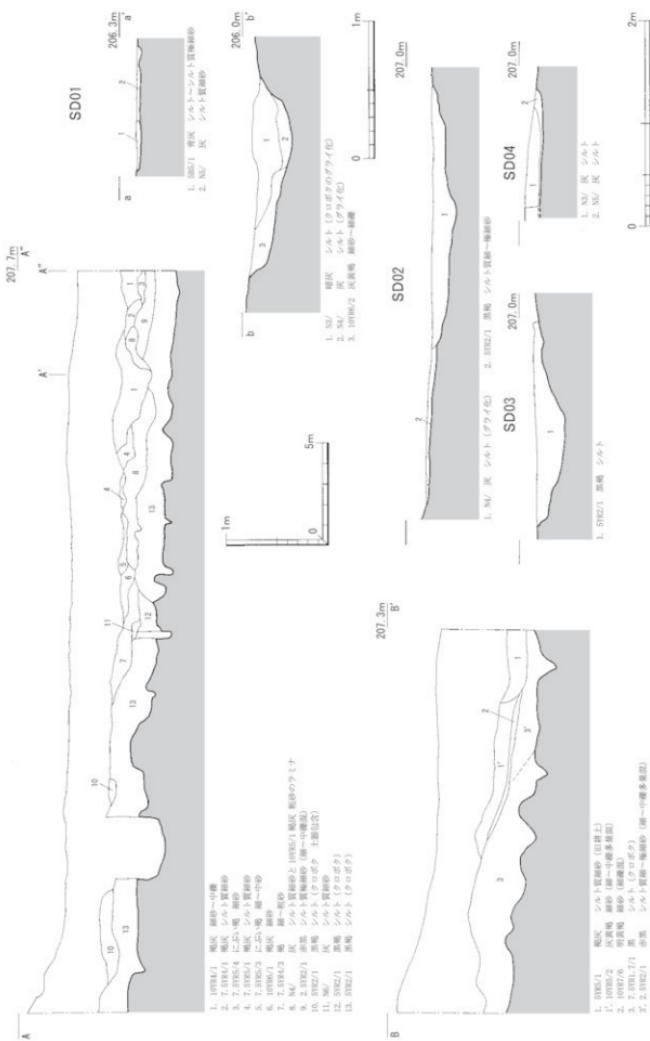


遺物出土状況 3



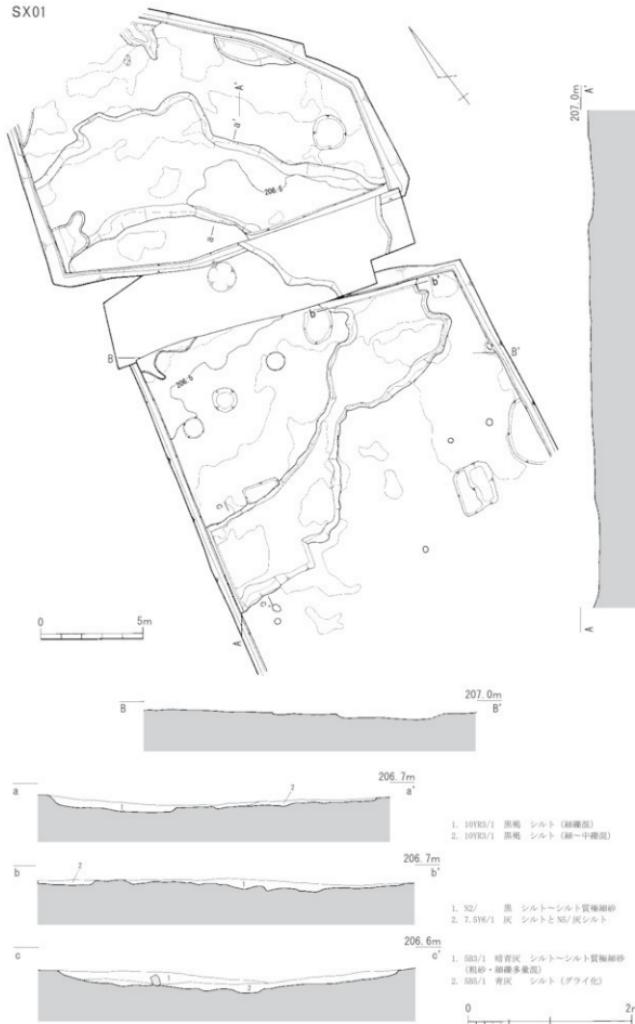
調査区全体図

図版20 遺構 柴崎遺跡



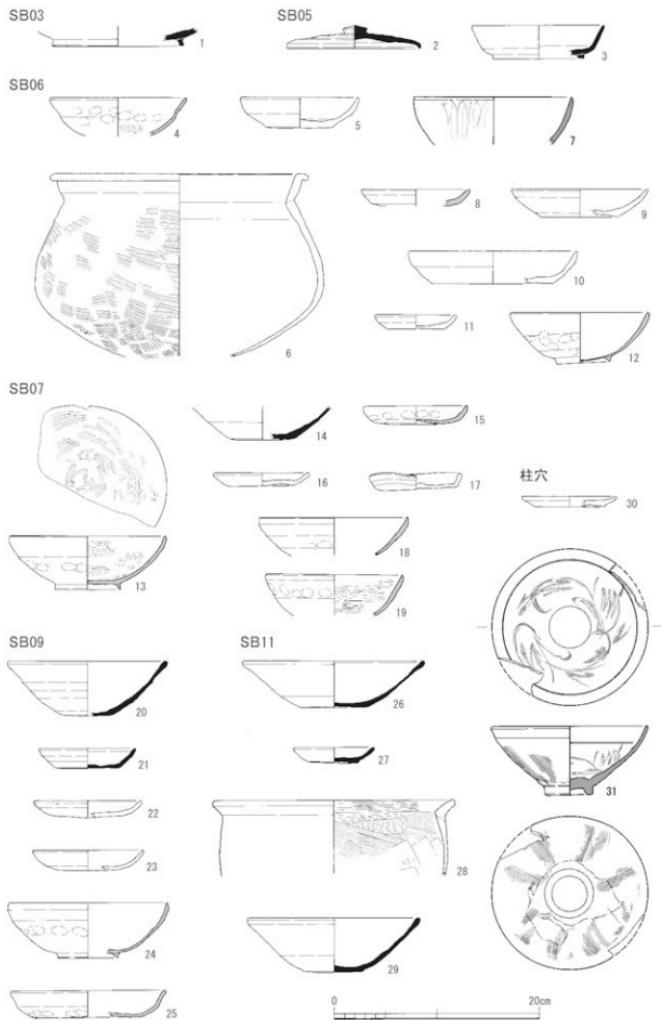
### 調査区・横断面図

SX01



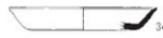
円形周溝墓

図版22 遺物 西岡屋遺跡



出土遺物 1

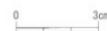
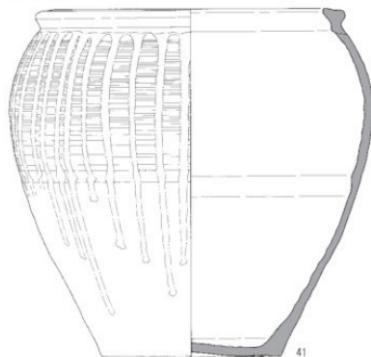
SD01



SD06



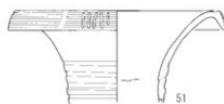
包含層他



出土遺物 2

図版24 遺物 ヤケヤノ坪遺跡

SX01



52

SX02



53



54

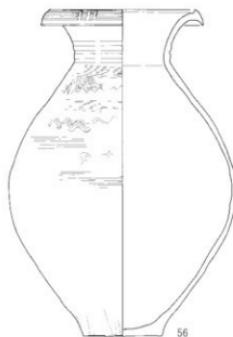


55

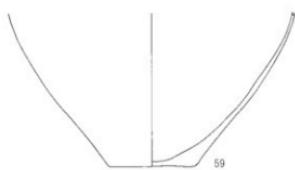


57

58



56

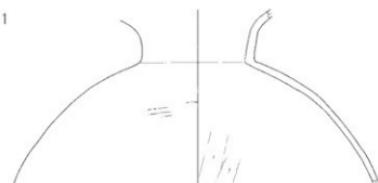


59



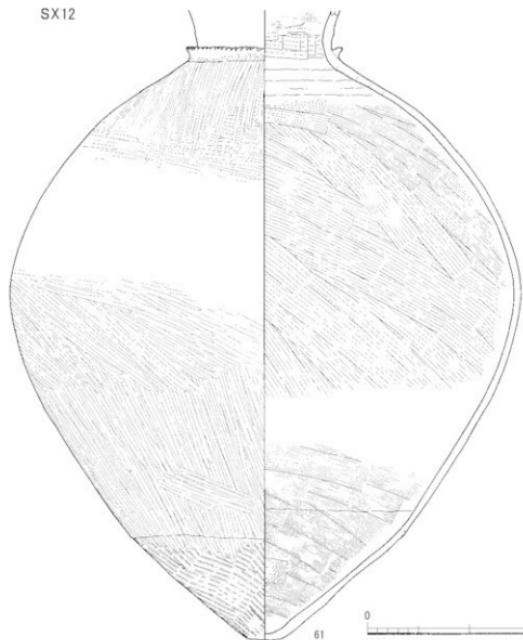
出土遺物 1

SX11



60

SX12



61



出土遺物 2

図版26 遺物 ヤケヤノ坪遺跡

SX04

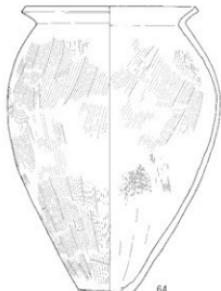


SX06

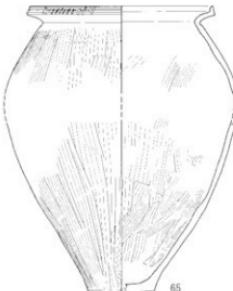


62

63

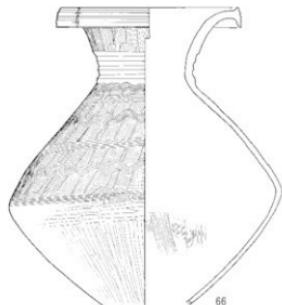


64



65

SX07



66



67



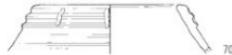
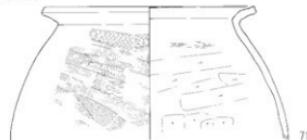
68

出土遺物 3

SX07



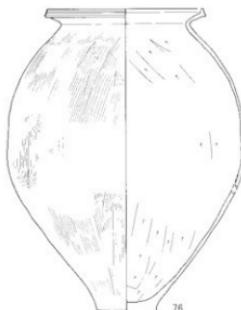
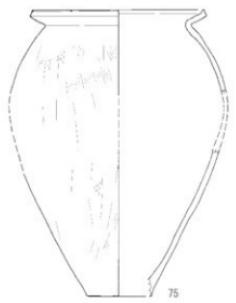
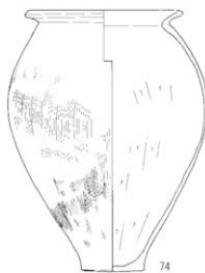
SX08



SX09



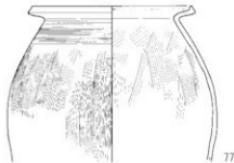
SX10



0 20cm

図版28 遺物 ヤケヤノ坪遺跡

SX10



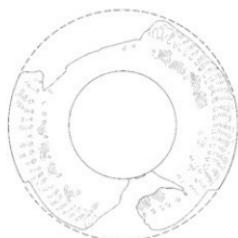
77



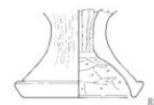
78



79



81

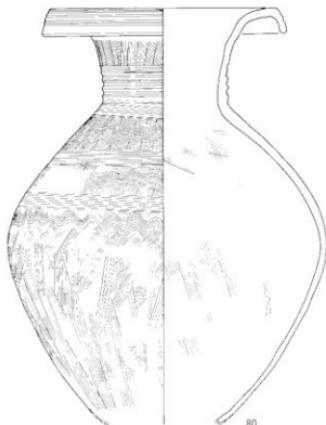


82

包含層



83



80

0 20cm



M3



10cm



M4

出土遺物 5

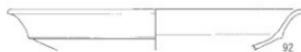
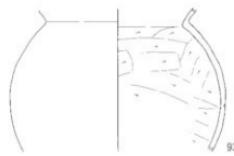
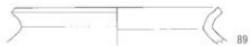
SK01



SD01



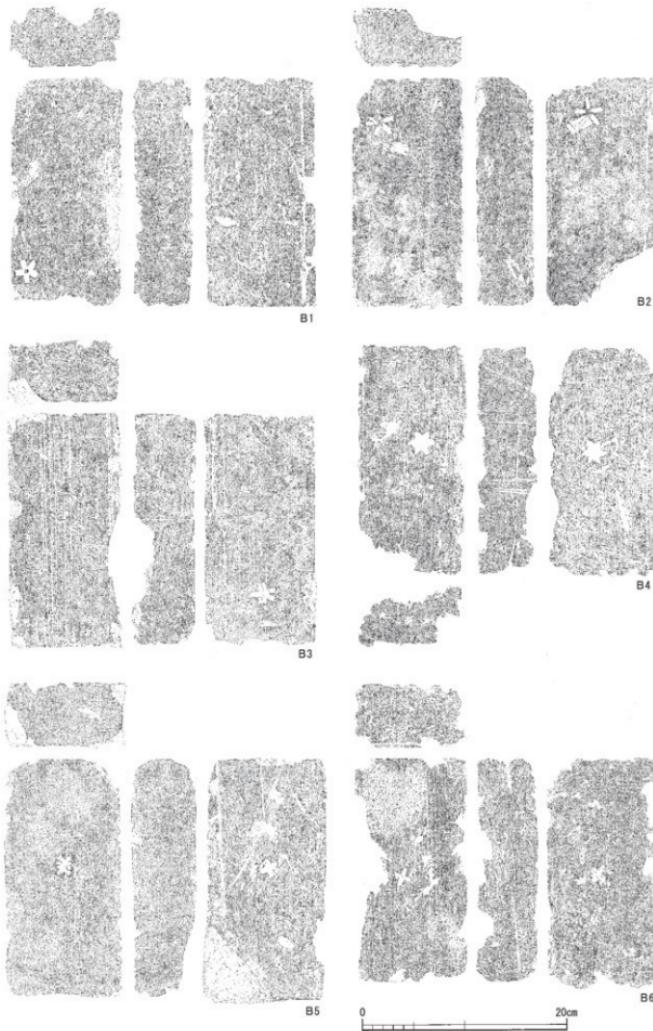
SX01



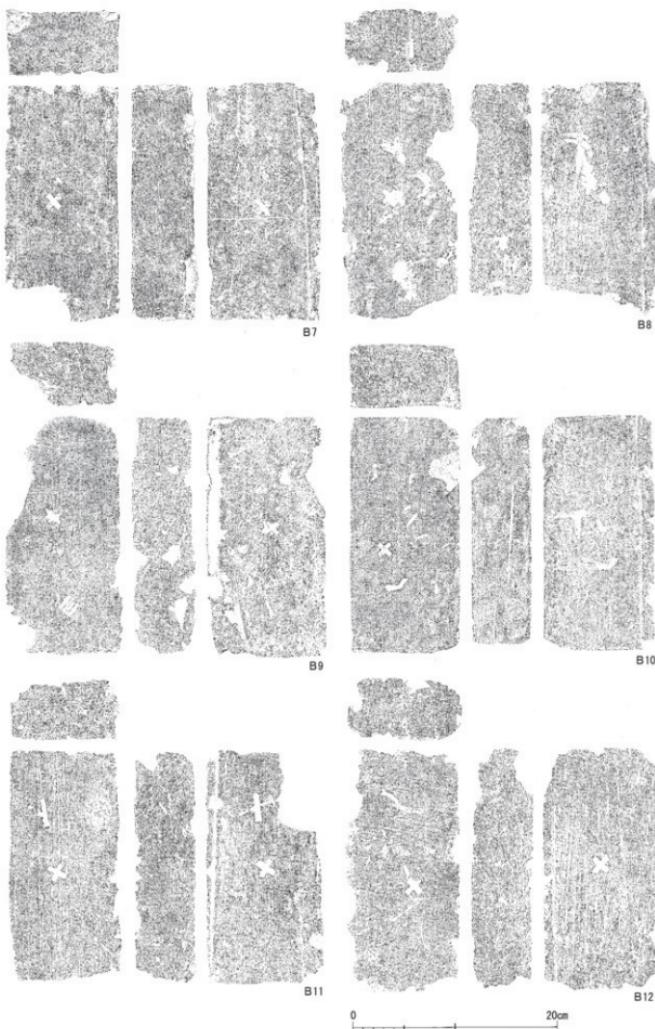
包含層



図版30 遺物 西岡屋遺跡他



出土焼瓦 1



出土煉瓦 2



SX10 土器出土状況（東から）



出土土器

巻頭写真図版 6 柴崎遺跡



2区全景（北から）



円形周溝墓 SX01（垂直写真：上が北）

## 例　　言

- 1 本書は、羅山市西岡屋に所在する西岡屋遺跡・ヤケヤノ坪遺跡・柴崎遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、長安寺西岡屋郷道路改良事業に伴うもので、兵庫県丹波県民局丹波土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館、公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。

### 3 調査の推移

(発掘作業) 確認調査 平成22年12月13・14・21日、平成23年2月17日、平成25年5月22・23日

実施機関：兵庫県立考古博物館

本発掘調査 西岡屋遺跡

平成23年6月4日～平成23年10月13日

実施機関：兵庫県立考古博物館

工事請負：株式会社石井緑化造園

ヤケヤノ坪遺跡

平成23年6月4日～平成23年10月13日

実施機関：兵庫県立考古博物館

工事請負：株式会社石井緑化造園

平成24年11月29日～平成24年12月25日

実施機関：(公財) 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

工事請負：株式会社石井緑化造園

平成25年5月22・23日

実施機関：兵庫県立考古博物館

柴崎遺跡

平成23年6月4日～平成23年10月13日

実施機関：兵庫県立考古博物館

工事請負：株式会社石井緑化造園

平成24年8月6日～平成24年8月8日

実施機関：兵庫県立考古博物館

(出土品整理作業)

平成26年4月1日～平成27年3月31日

実施機関：公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

平成27年4月1日～平成28年3月31日

実施機関：公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

- 4 本書の編集・執筆は、公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 長濱誠司が担当した。

- 5 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

- 6 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。

- 7 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々にご指導・ご協力をいただいた。記して感謝いたします。

様山市教育委員会、池田正男

## 本文目次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯·····	1
第2節 発掘調査の経過·····	2
第3節 出土品整理作業の経過·····	7
第2章	
第1節 地理的環境·····	9
第2節 歴史的環境·····	9
第3章 西岡屋遺跡の調査	
第1節 遺跡と調査の概要·····	13
第2節 道構·····	13
第3節 出土遺物·····	17
第4節 小結·····	24
第4章 ヤケヤノ坪遺跡の調査	
第1節 遺跡と調査の概要·····	25
第2節 道構·····	25
第3節 出土遺物·····	30
第4節 小結·····	32
第5章 栄崎遺跡の調査	
第1節 遺跡と調査の概要·····	33
第2節 道構·····	33
第3節 出土遺物·····	34
第4節 小結·····	35
報告書抄録·····	36

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置·····	vi
第2図 調査区の位置·····	2
第3図 確認調査の位置·····	4
第4図 本発掘調査区の位置·····	6
第5図 周辺の遺跡·····	12

## 表 目 次

第1表 西岡屋遺跡出土煉瓦計測表.....23

## 図版目次

図版 1	西岡屋遺跡	遺構	調査区全体図・断面図
図版 2	西岡屋遺跡	遺構	掘立柱建物跡 1
図版 3	西岡屋遺跡	遺構	掘立柱建物跡 2
図版 4	西岡屋遺跡	遺構	掘立柱建物跡 3
図版 5	西岡屋遺跡	遺構	溝
図版 6	ヤケヤノ坪遺跡	遺構	調査区全体図
図版 7	ヤケヤノ坪遺跡	遺構	調査区断面図
図版 8	ヤケヤノ坪遺跡	遺構	方形周溝墓 1
図版 9	ヤケヤノ坪遺跡	遺構	方形周溝墓 2
図版10	ヤケヤノ坪遺跡	遺構	方形周溝墓 3
図版11	ヤケヤノ坪遺跡	遺構	方形周溝墓 4
図版12	ヤケヤノ坪遺跡	遺構	方形周溝墓 5
図版13	ヤケヤノ坪遺跡	遺構	方形周溝墓 6
図版14	ヤケヤノ坪遺跡	遺構	土器棺墓
図版15	ヤケヤノ坪遺跡	遺構	土壙墓・掘立柱建物跡
図版16	ヤケヤノ坪遺跡	遺構	遺物出土状況 1
図版17	ヤケヤノ坪遺跡	遺構	遺物出土状況 2
図版18	ヤケヤノ坪遺跡	遺構	遺物出土状況 3
図版19	柴崎遺跡	遺構	調査区全体図
図版20	柴崎遺跡	遺構	調査区・遺構断面図
図版21	柴崎遺跡	遺構	円形周溝墓
図版22	西岡屋遺跡	遺物	出土遺物 1
図版23	西岡屋遺跡	遺物	出土遺物 2
図版24	ヤケヤノ坪遺跡	遺物	出土遺物 1
図版25	ヤケヤノ坪遺跡	遺物	出土遺物 2
図版26	ヤケヤノ坪遺跡	遺物	出土遺物 3
図版27	ヤケヤノ坪遺跡	遺物	出土遺物 4
図版28	ヤケヤノ坪遺跡	遺物	出土遺物 5
図版29	柴崎遺跡	遺物	出土遺物
図版30	西岡屋遺跡	遺物	出土煉瓦 1
図版31	西岡屋遺跡	遺物	出土煉瓦 2
図版32	西岡屋遺跡	遺物	出土煉瓦 3

## 卷頭写真図版目次

- |          |         |                       |
|----------|---------|-----------------------|
| 卷頭写真図版 1 | 遺跡      | 遠景（東から）／遠景（西から）       |
| 卷頭写真図版 2 | 遺跡      | 全景                    |
| 卷頭写真図版 3 | 西岡屋遺跡   | 全景／古代の掘立柱建物跡          |
| 卷頭写真図版 4 | ヤケヤノ坪遺跡 | 平成23年度調査区全景／方形周溝墓SX01 |
| 卷頭写真図版 5 | ヤケヤノ坪遺跡 | SX10土器出土状況／出土土器       |
| 卷頭写真図版 6 | 柴崎遺跡    | 2区全景／円形周溝墓SX01        |

## 写真図版目次

- |        |       |   |
|--------|-------|---|
| 写真図版 1 | 遺跡    | 遺跡周辺  |
| 写真図版 2 | 遺跡    | 遺跡遠景／遺跡全景   |
| 写真図版 3 | 西岡屋遺跡 | 遺構 1区調査前／2区調査前／遺跡周辺の状況  |
| 写真図版 4 | 西岡屋遺跡 | 遺構 調査区全景  |
| 写真図版 5 | 西岡屋遺跡 | 遺構 1区全景／2区全景／1区西壁断面   |
| 写真図版 6 | 西岡屋遺跡 | 遺構 SB01-05／SB01 SB01 P1 断割断面／SB01 P3 断割断面／SB01 P4 断割断面／SB02-03／SB02 P1 断割断面／SB03 P2 断割断面／SB02 P3 断割断面／SB03 P2 断割断面／SB03 P3 断割断面／SB04 SB04 P3 断割断面／SB04 P4 断割断面／SB04 P5 断割断面 |
| 写真図版 7 | 西岡屋遺跡 | 遺構 SB02 P2 断割断面／SB02 P3 断割断面／SB03 P2 断割断面／SB03 P3 断割断面／SB04 SB04 P4 断割断面／SB04 P5 断割断面   |
| 写真図版 8 | 西岡屋遺跡 | 遺構 SB04 P6 断割断面／SB04 P7 断割断面／SB05 SB05 P1 断割断面／SB05 P2 断割断面／SB05 P3 断割断面／SB05 P4 断割断面   |
| 写真図版 9 | 西岡屋遺跡 | 遺構 SB05 P5 断割断面／SB05 P7 遺物出土状況／SB06 SB06 P1 断割断面／SB06 P3 断割断面／SB06 P6 断割断面／SB06 P7 断割断面／SB06 P8 断割断面  |
| 写真図版10 | 西岡屋遺跡 | 遺構 SB06 P6 遺物出土状況／SB06 P12 断割断面／SB07 SB07 P1 断割断面／SB07 P3 断割断面／SB07 P4 断割断面／SB07 P5 断割断面／SB07 P6 断割断面   |
| 写真図版11 | 西岡屋遺跡 | 遺構 SB07 P7 遺物出土状況／SB07 P9' 遺物出土状況／SB08 P1 断割断面／SB08 P2 断割断面／SB08 P3 断割断面／SB08 P5 断割断面／SB09 P1 断割断面／SB09 P2 断割断面   |
| 写真図版12 | 西岡屋遺跡 | 遺構 SB09 P6 断割断面／SB09 P2 遺物出土状況／SB09 P2 横石棟出状況／SB10 P4 断割断面／SB11 P1 断割断面／SB11 遺物出土状況   |
| 写真図版13 | 西岡屋遺跡 | 遺構 SD01／SD01断面／SD10-11  |
| 写真図版14 | 西岡屋遺跡 | 遺構 SD03断面／SD05断面／SD06断面／SD06遺物出土状況（1）／SD06遺物出土状況（2）／SD10断面／SD11断面   |

- 写真図版15 ヤケヤノ坪遺跡 遺構 ヤケヤノ坪遺跡全景／平成23年度調査区全景（南半部）
- 写真図版16 ヤケヤノ坪遺跡 遺構 平成23年度調査区全景（北半部）／平成23年度調査区全景
- 写真図版17 ヤケヤノ坪遺跡 遺構 調査前／平成23年度調査区全景（南半部）／平成23年度調査区全景（北半部）
- 写真図版18 ヤケヤノ坪遺跡 遺構 平成24年度調査区全景／調査区東壁断面
- 写真図版19 ヤケヤノ坪遺跡 遺構 SX01検出状況／SX01全景／SX01西周溝断面／SX01南周溝断面／SX02全景／SX02西周溝断面／SX02南周溝断面
- 写真図版20 ヤケヤノ坪遺跡 遺構 SX03全景／SX03埴丘上全景／SX03西周溝断面／SX03南周溝断面／SX03東周溝断面／SK02／SK02断面
- 写真図版21 ヤケヤノ坪遺跡 遺構 SX04・05・06／SX04・05／SX04全景／SX04西周溝断面／SX04周溝内遺物出土状況／SX05全景／SX05北周溝断面／SX05南周溝断面
- 写真図版22 ヤケヤノ坪遺跡 遺構 SX06・07／SX06全景（東から）／SX06全景（南から）／SX06東周溝内遺物出土状況（1）／SX06東周溝内遺物出土状況（2）／SK04／SK04完掘状況
- 写真図版23 ヤケヤノ坪遺跡 遺構 SX07全景（北から）／SX07全景（東から）／SX07東周溝内遺物出土状況／SX08全景／SX09周溝内遺物出土状況／SX10全景／SX10東周溝断面
- 写真図版24 ヤケヤノ坪遺跡 遺構 SX10東周溝内遺物出土状況／SX10東周溝内遺物出土状況（下層）／SB01／SB01 P1断割断面／SB01 P2断割断面／SB01 P3断割断面／SB01 P4断割断面／SB01 P5断割断面
- 写真図版25 柴崎遺跡 遺構 1～3・5～7区調査前／4区調査前／遺跡の遠景
- 写真図版26 柴崎遺跡 遺構 1区全景／2・3区全景
- 写真図版27 柴崎遺跡 遺構 1区全景／2・3区全景／3区全景
- 写真図版28 柴崎遺跡 遺構 1区東壁断面／2区東壁断面／4区SR01／5区全景（SD01）／6区全景（SX01周溝）／7区全景／作業風景
- 写真図版29 柴崎遺跡 遺構 SX01全景／SX01周溝（a-a'）断面／SX01周溝（b-b'）断面／SX01周溝（c-c'）断面／SX01周溝内遺物出土状況（北東から）／SX01周溝内遺物出土状況（東から）／SX01周溝内遺物出土状況
- 写真図版30 柴崎遺跡 遺構 SD01／SD01（a-a'）断面／SD01（b-b'）断面／SD02断面／SD03断面／SD04断面
- 写真図版31 西岡屋遺跡 遺物 出土遺物 1
- 写真図版32 西岡屋遺跡 遺物 出土遺物 2
- 写真図版33 西岡屋遺跡 遺物 出土遺物 3
- 写真図版34 西岡屋遺跡 遺物 出土遺物 4
- 写真図版35 ヤケヤノ坪遺跡 遺物 出土遺物 1
- 写真図版36 ヤケヤノ坪遺跡 遺物 出土遺物 2
- 写真図版37 ヤケヤノ坪遺跡 遺物 出土遺物 3

- 写真図版38 ヤケヤノ坪遺跡 遺物 出土遺物 4  
写真図版39 ヤケヤノ坪遺跡 遺物 出土遺物 5  
写真図版40 ヤケヤノ坪遺跡 遺物 出土遺物 6  
写真図版41 柴崎遺跡 遺物 出土遺物 1  
写真図版42 柴崎遺跡 遺物 出土遺物 2  
写真図版43 西岡屋遺跡他 遺物 出土煉瓦 1  
写真図版44 西岡屋遺跡他 遺物 出土煉瓦 2／ヤケヤノ坪遺跡出土軍隊食器



第1図 遺跡の位置

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

長安寺西岡屋線は、篠山市長安寺と同市西岡屋を結ぶ一般県道であり、篠山川北岸地域の主要道路である。同路線のうち西岡屋地内は篠山市街地の西側を南北に通過することから、市街地のバイパスとして利用され交通量も多い。しかし幅員が狭く車両のすれ違いが困難であるうえに歩道の整備が十分ではなかった。特に沿線には幼稚園、小学校や高等学校が所在し通学路としての機能も有しているため、通学時間帯の児童・生徒の安全確保が課題となっていた。そこで道路の拡幅とともに歩道を整備し歩行者の安全を確保するための事業が兵庫県丹波土木事務所（旧兵庫県柏原土木事務所）により計画された。事業対象地内には周知の遺跡はなかったものの、周辺に目を広げると「郡家」地名が残るなど古代多紀郡の中核地域と考えられる地域であることから分布調査を行い、その後埋蔵文化財の取扱いは、用地買収など事業の進捗にあわせて対応した。

### 第2節 発掘調査の経過

#### 1. 分布調査

平成9年度

遺跡調査番号 970450

調査年月日 平成10年2月27日

調査面積 3,000m<sup>2</sup>

調査担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

企画調整班 矢野 治巳

#### 概要

事業地のうち小谷池北側、西岡屋集落内や南側の水田で須恵器片を採集し、事業範囲に遺跡の存在が想定された。

平成22年度

遺跡調査番号 2010268

調査年月日 平成22年10月29日

調査面積 1,410m<sup>2</sup>

調査担当者 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

企画調整課 上田 健太郎

#### 概要

平成9年度に調査できなかった本発掘調査ヤケヤノ坪遺跡の範囲を対象とした。対象地内の耕作地で中世の遺物が散布することが確認できた。



第2図 調査区の位置

## 2. 確認調査

平成22年度

遺跡調査番号 2010262

調査年月日 平成22年12月13・14・21日

調査面積 99m<sup>2</sup>

調査担当者 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

調査第1課 久保 弘幸

### 概要

北地区（NT 1～5）

本発掘調査の柴崎遺跡に該当する範囲の確認調査である。土坑・柱穴・溝・旧河道を検出し、主に古墳時代の遺物が出土した。

南地区（ST 6～11）

本発掘調査の西岡屋遺跡に該当する範囲の確認調査である。溝・柱穴などを検出したが、交差点の南側は旧河道にあたりたため道構は検出できなかった。

遺跡調査番号 2010236（柴崎遺跡）

2010286（ヤケヤノ坪遺跡）

調査年月日 平成23年2月17日

調査面積 34m<sup>2</sup>（ヤケヤノ坪遺跡30m<sup>2</sup>、柴崎遺跡4 m<sup>2</sup>）

調査担当者 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

企画調整課 上田 健太郎

### 概要

T 1～7

柴崎遺跡に該当する範囲のうち前回確認調査未実施範囲（T 1）とヤケヤノ坪遺跡に該当する範囲（T 2～7）を対象とした。

T 4～7では溝、土坑、柱穴を検出し、古墳時代以降の遺物が出土した。T 2・3は谷部にあたりたため道構は確認できなかった。T 1は谷部にあたり、遺跡の広がりは確認できなかった。

平成25年度

遺跡調査番号 2013037

調査年月日 平成25年5月22・23日

調査面積 8 m<sup>2</sup>

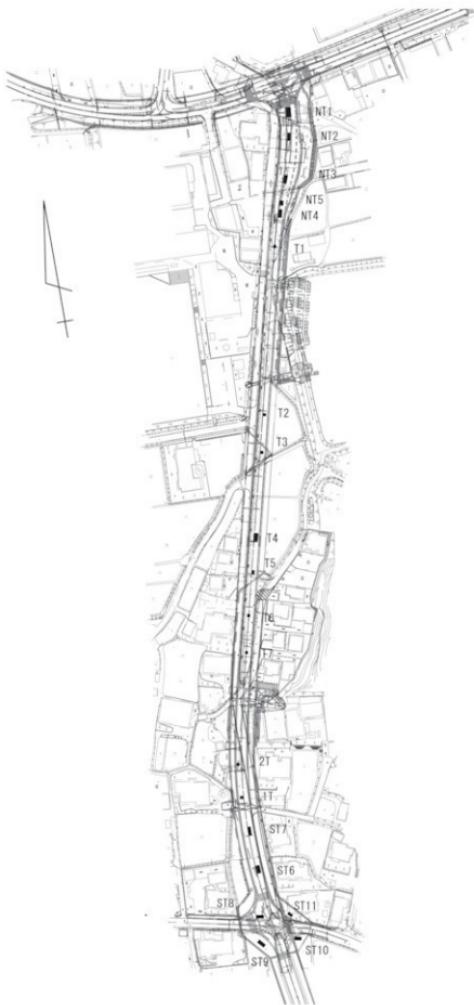
調査担当者 兵庫県立考古博物館総務部

埋蔵文化財課 多賀 茂治

### 概要

1 T・2 T

西岡屋遺跡本発掘調査区の北隣接地を対象としたが、道構・遺物ともに確認できず、遺跡の範囲外であると判断した。



第3図 確認調査の位置